
世界紀行

蛍火

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界紀行

【Nコード】

N8469W

【作者名】

蛍火

【あらすじ】

黒光りする剣を背に負う剣士。夢見る見習い魔法師。笑顔の裏にまで嘘を張りつかせた奇術師。直情的で剣術の達人な姫君。愛の力は無敵なカップル。仁義に厚い女海賊。頭のネジが外れた狂氣的科学者。かましい三人姉妹……。

願いを叶える宝物が眠ると言われる大迷宮、『世界』。

そこでは個性豊かすぎる奴らが例の『宝具』を求めて、今日もあっちへ行ったりこっちへ行ったり。

忙しいあいつらは『世界』に吞まれ、深部を目指す。

プロローグ

人にはそれぞれ、叶えたいと思う願いがある。

それは例えば、世界征服といった大それたものから恋焦がれるの人との恋愛であつたりと実に様々であるが、どのような形であれ、人には少なからず願望が存在すると言つていい。

突然であるが、もしもどんな願いでも一つだけ叶えられるとしたら？

叶えられる願いをさらに増やす、死人を復活させるなどの願いですら叶えられるとしたら。

食いついてくる、欲望盛んな人間がいてもおかしくはない。

そのダンジョンは、奥底にどんな願いでも一つだけ叶えられる『宝具』が眠っているという。

世界最高峰の大予言者とまで言われた、とある詩人がそう言い残したのだ。

世界中は一気に沸き立った。

入れば戻つてこれない、帰つて来たものがない、神域とまで呼ばれたそこには、かつて滅んだと言われる魔族や妖霊の類、また神獣などといった強大な存在が多くいて、ダンジョンの奥深くへ進入するのを強く、拒んでいる。

神の陵、まがたみ魔神の封印場所、命あるダンジョンと呼称される大迷宮、『世界』。

その名の通り、ダンジョンへ進入する為の唯一の手段である扉の

向こう側には、『こちら側』とは全く異なつた広大な世界そのものが広がっていた。

魔法が跋扈し、モンスターが徘徊する危険地帯。砂漠があれば海まで存在し、高くそびえる塔があるかと思えば地下深くまで根を張る洞窟も見受けられる。

町まで存在しているのでは、世界そのものがダンジョンであると言わざるを得なかった。

人は一人、また一人とそこへ進入し、願いを叶える『宝具』とやらを求めてダンジョン内を進む。

中には国を挙げてダンジョンへ入っていくところもあり、『世界』の人口は日ごとに上昇の一途をたどっていた。

そして、また一人、扉の前に立つ者が現れる。

内に願いを秘めた存在が、『世界』の扉をあけて、その足を踏み入れた。

初めに広がっていたのは、広大な草原。

「よし」

青年はそう呟いて、見たこともない、しかし柔らかい草の上に自らの足を踏みつけた。

街へ

見る限り、草原は地平線まで続いていた。

まさに見渡す限りの大平原だ。

青年、アルスはそこで、大迷宮、『世界』へ進入したのだと実感が湧く。

「すごいな、これ」

端的に感嘆を表し、少しニヤけながらさわさわと靡く草原を歩き出す。さくさくと小気味いい音がアルスの耳に響き、どこことなく故郷を想起させた。

黒い髪に同色の瞳、纏う衣服まで黒で染められた男の背中には、これまた漆黒の剣が装備されていた。姿はまるで影のような男だったが、その顔には一切の曇りはなく、精悍な顔つきは水で流されたあとのようにすっきりとしている。年は二十歳前後と見受けられ、黙っていれば大抵の女性からは好印象を受けそうだった。

さくさくさく……、アルスは数歩歩いて振りかえる。

自分が入った直後はあった扉が消えうせ、辺りは全く草の原だけとなってしまうていた。

もう、後戻りはできない。

自分に言い聞かせるように言つて、再び前を向く。

ここは、どこの世界にあるどんな大迷宮よりも深く、かつ広いダンジョンだ。

街、山、森、洞窟、塔、城、草原、砂漠、海、神殿など、ダンジョンの中に更にダンジョンがあるという矛盾を体現し、あたかも一つの世界であるかのように存在する。

大予言者と謳われた詩人がそう言い残し、アルスはそれが真実であつたのだと理解する。

世界の様にあるから、ダンジョンとしての名前がそのまま『世界』。簡単な理由だったが、同時に簡潔に分かるほど広大で深いという

ことを表していた。

ダンジョンに入ったものは例外なく帰らぬ人となり（詩人は唯一の帰還者ではないかと言われていたが、本人が否定した）、最初のうちは誰も立ち入らないようになっていた。しかし、その詩人がダンジョンの奥深くに眠ると言った宝物の話が、アルスの元いた世界の住人に火を付けた。

如何なる願いでも聞き入れ、叶える『宝具』。

詩人は宝物の話をこのように述べた。

今や向こう側となってしまうた世界では、その宝物の話を聞いて俄然、やる気が湧いたのだろう。一人、また一人とダンジョンへ通じる扉がある祭壇へとやってきて、こちら側へと踏み出した。

アルスもその中の一人だ。当然、狙いはその宝物にある。

噂によると、ライデンワーツという国ではその総力を挙げて進入したと聞くが、アルスが見た現実には総力をダンジョンに注ぎ込んだ所為で弱体化し、他国に侵略されたその国の姿だった。ライデンワーツ以外に国を挙げて進入するところがないのは、弱体化を恐れていることだろうと判断できる。

しかし、ライデンワーツの噂からも分かる通り、詩人の言った『宝具』はそれほどまでに魅力的な代物なのだ。欲しがるものがないはずがない。

ダンジョン、『世界』に進入する全ての者は皆、それを狙ってやって来た者たちだ。

アルスもその一員として、大草原の草を踏みしめている。

他の者と同じように、『願い』を胸の内に秘めて。

さわ……。

突然、草が風に吹かれた以外の理由で動いた。

アルスはそれに素早く反応し、歩んでいた足を止める。

何者かが、草の陰に隠れてこちらを窺っているのだ。

何者だ？ いや、人ではないかもしれないな。魔物か？

アルスの中で様々に可能性が膨らんでいく。

元いた世界には魔族などといった、ファンタジーな存在はいなかった。というのも、かつて『勇者』と呼ばれた者が『魔王』なる存在を討ち滅ぼしてからも魔族などを殲滅していき、最終的には絶滅へと追いやったからだ。

以上の理由より、アルスは魔物を書物でしか見たことがない。

緊張が走る反面、同時に期待感も湧いた。

アルスの黒目が草の動きを捉える。

少しずつ、自分に近付いてきていた。

そして、それは唐突に飛び出してきた。

「グアアア！」

牙を？いてアルスに飛びかかってきたのは、蛇のように長い体躯に毛をもじやもじやと生やした犬頭だった。蛇と犬のキメラのような魔物だ。

アルスはその魔物の姿を見て目を輝かせながら、手は容赦しなかった。

犬の頭部がアルスの首筋に飛びつく寸前、アルスの神速抜刀術が映えた。

シャツと剣が抜かれた音も刹那、抜刀と同時に振り下ろされた刃が魔物の首に食い込む。

そして、犬の頭部は刎ねられた。

飛びつこうとした勢いもそのままに、首の断面から鮮血を噴射しながら前方へ吹っ飛ぶ。残った体の方もビクビクと痙攣しながら、同じように血を噴いて寝転がった。

へえ、さすがダンジョンだ。魔物がいやがる。

アルスは手慣れているらしく、今しがたこびり付いた血を横薙ぎに払ってから、元の鞘におさめる。

それから、さっきまで目を輝かせていたのにも関わらず死体には目もくれずに再び歩き出した。

今ので、この『世界』には魔物までいるということが証明された。つまり、非常に危険な地帯だということだ。街に入っただとしても、魔物が侵攻してこないとは言い切れないだろう。

どこでも警戒を怠るなってことか。

早くもダンジョンでの生き方を悟りながら、アルスは歩くのをやめない。

道中、何度か先ほどと同種の魔物に出会いながら、アルスはようやく街に辿り着いた。

疲弊の様子もないようだったが、並の戦士であれば魔物の餌になっているか、もしくは歩き疲れてその場でへたり込むかのどちらかはしそうなものだ。そうならないということは、暗にアルスが常人でないことを物語っていた。

見渡す限りの平原はすでに背後に回り、振り返らなければ見えなくなっていた。

代わりに目の前に広がるのは、やたらと高く聳^{そび}える壁に囲まれた街。

いかつい街づくりだなあ、と感想を抱きながら、草を踏む感触が石畳のそれに変わる。

漆黒の剣士の姿は、壁の高い街へと吸い込まれていった。

＋＋＋＋＋

もう泣きだしたい。

そう思っていることが顔に出て、目に湿っぽさを含む少女が草原を歩いていた。

真っ青なベレー帽をずらした様に被り、涙をこらえたその瞳は明るく澄んだ空のような色合いだった。その水色は腰ほどまである長

い髪の毛にも伝染しており、着用している純白のワンピースと相俟って明るく澄みきった印象を与える。その手には短く、玩具と見紛うばかりの杖が握られており、それが辛うじて「もしかして魔術師かな？」と思わせる要因となっていた。端正な顔立ちとは同性から嫉妬されそうな程美しく、愛らしい。杖さえなければ、どこぞの国の姫君と言われても納得がいく姿をしている。

しているの、だが。

「わ、キャア！」

王族のように毅然とした振る舞いでは一切なく、石につまづいただけでアタフタと自ら足を纏れさせにくような少女は、他から羨まれるほどの顔から地面に突っ込んだ。身に着けていたポーチから、何やら道具のようなものが散らばり出る。

幸い、手をついたことで顔面直撃は免れたものの、何もないところでつまづいたことへの情けなさでしばらく懨然としてしまう。膝を草の上についたまま、今度は本当に泣き出しそうになっていた。

家に帰って、お布団に包まって寝たい……。

そう思いながら、草の上に散らばったものをかき集める。

手鏡などの小道具、食糧かなにかが入っていそうな袋、また、本人の名前らしきアイリと大きく表紙に記された手帳…… などなどをポーチに詰め込みながら、またも大きく息をつく。

アイリは『世界』に入って一日もしないうちに、ダンジョンでの生活を諦めかけていた。

理由は二つあって、歩いてても歩いてても広がる大平原に希望が見出せなくなったというのが理由の一つ。そしてもう一つはただ一人で心細くなったのだ。せめてあと一人、一人でもいてくれればその寂寥感も拭われただろうが、この広大な草原には人どころか、虫一匹の姿すら確認されなかった。どこぞの花にも話しかけていそうなアイリだが、さすがに風くらいしか話し相手としていなさそうな場所では心細くて死にそうらしい。ウサギという動物と少し似たところのあるアイリであった。

立ち上がって、純白のワンピースについた汚れを払う。そして希望へと縋るように周りを見回すと、やはり何もなかった。またまた、落ち込む。

この世界には私一人きりだとか、そんなことないよね……。

そろそろ世界に対して不安と疑心を募らせ始めたアイリ。もはや末期である。

うなだれて歩き出そうとすると、そこでアイリの耳になにか、音が飛び込んできた。

金属と金属が弾きあう、キンキンとかしましい音だ。目と耳と鼻がよく利くアイリだからこそ、やたら遠くから聞こえる戦闘音も生々しく聞こえた。

音は止まない。

アイリは怖くなって、逃げ出したい衝動に駆られた。そして、その衝動のまま走りだす。

今までは、魔物がいるということで大人しく歩いていたのだが、出来るだけ戦闘から離れたい一心となった今のアイリにそんなことを考えている余裕はない。こんな隠れる場所もないような草原では、敵に出会った時点でおしまいなのだ。なぜなら、アイリは弱い。

「み、見習いの魔術師なのにくっ」

泣き出しそうになるのを、必死の声で押しとどめようとした結果、むしろ大粒の涙が目じりに溜まってしまうこととなる。とことんどきな少女である。

しかも、運まで悪いらしい。

アイリが必死になって走っていると、前の草原でなにかがうごめいた。

「ひっ！」

短い悲鳴を上げ、急停止する。ついでにスリップしそうになり、危うく尻もちをつくところだった。

かさかさ、かさかさと草が左右に揺れ、アイリの不安まで揺する。何？ 何が出てくるの？

神経質になっているアイリが一步、慎重に後ずさる。

しかし、それが契機となったように、隠れていた影はバツと飛び出してきた。

犬の頭をした、毛むくじゃらの蛇だ。

シャギーテイルっ！

アイリは図鑑で見たことのあるその魔物の名前を見事言い当て、突進して噛みつきこうとしてくるその攻撃を寸でのところで避けた。頭を抱えながら横へ飛び込むようにしたため、側頭部をもろに打ち付けることは無かったが、アイリの柔らかそうな手の甲が少し擦りむく。

シャギーテイルは目標を見失い、しばしの間探すように辺りを見回していたが、どうやら臭いで場所を特定したらしく、急にアイリの方を振り返って威嚇を始めた。

態勢を立て直している最中であつたアイリは、勿論ながらその威嚇に気圧され、縮み上がる。

しかし、アイリはそこでそういえば、と思い当たることがあつた。シャギーテイルは臆病な魔物だ。ドシドシと大きな足音を立てて近づいてくれば、防衛本能から対象を攻撃しようとしてくる。また、威嚇するのも、近付かないでくれ、というサインなのだ。

つまり、シャギーテイルは刺激さえしなければ攻撃してこない。アイリはそう思い当たり、咄嗟に詠唱しようとした口を固く結ぶ。そして、徐々に後方へ下がって最終的には退避しようという計画を実行に移す。

シャギーテイルとのにらみ合い。

死ぬか生きるかの極限状態で、アイリの思考は冴えていた。しばらく下がって、距離をとったところで、アイリの口が開かれる。

「私の意思を其の者へ」、私はあなたの敵ではありません」

アイリが言った瞬間、持つ杖から淡く発光する魔力がシャギーテイル目掛けて飛んで行った。

その突然の出来事に、アイリに飛びかかるうとした犬頭の魔物はしかし、そこでアイリの意思が伝わったかのように急に大人しくなり、その場からそくさと去っていった。

「ふ、ふえ……」

思わず大きな溜息をついて、その場にへたり込んでしまう。

今のは、アイリが意思表示をする魔法で相手に敵意がないことを伝えたことで、どうやら退散をしてもらったらしい。相手も相手で怯えているのだから、この場から早く離れたいのはお互い一緒なのだ。

アイリはそのままずっと座りこんでいたい気分だったが、現実はその甘くない。

アイリはまたすぐに、立ち上がる羽目になった。

ザウツ という、風を薙ぐ音が聞こえたからである。

見ると、どうやら他のシャギーテイルと戦っていたらしき何者かが剣を振るったところらしい。シャギーテイルの首が吹っ飛び、頭部と胴体部から血飛沫が撒き散らされていた。

黒い髪に黒い瞳、さらに黒い衣服を身に纏い、拳句には漆黒の剣を手に持つ精悍な顔つきの青年だった。一言で言えば影のようで恐ろしかったが、顔がいいということであなから油断を誘っている。厳しい表情ではなく、明朗な表情もそれに一役買っていた。

青年は剣に付着した、まだ水っぱいその赤色を横薙ぎに払って再び歩き出す。

あの人は強い人だ、と直感的にアイリは悟った。

青年についていけば、あるいはダンジョン攻略も楽になるかもしれない。

アイリは簡単にそう思って、青年からかなり離れた距離を保って歩くことにした。

腰をやや屈め、草にまぎれるようにしながら、漆黒の剣士の後を追う。

しばらくの後、アイリは読み通りに街へたどり着くことができた。青年の姿が街へ消えてから、自分も街へ入っていく。青いベレー帽を被る水色の少女が、街へ到着した。

＋＋＋＋＋

犬頭の蛇がいたので近付いてみた。すると、どういうわけか彼らはこちらに襲いかかるうとはせずに、一目散に逃げ出すのである。拍子抜けですねえ。

怪しい男が薄笑いを浮かべて近付いてきたら、それは確かに注意すべきなのだろうが、この男の場合は注意を払うだけでは足りずに、どこことなく危険な雰囲気まで含んでいた。

それはまあ、主に見かけが多分に関わっているのだが。

紫色の薔薇が飾られた影のごとくシルクハットを傾けて頭に載せ、肩にも奇妙な鳥が乗っていた。濃い紫色の、袖がフリルのようにびらびらしたシャツの上から、赤い刺繍の施された白いマントを羽織っている。年は大体二十代前半から半ばといった見た目であり、右目に碧玉、左目に紅玉でもはめ込んでいるかのような、オッドアイの持ち主だ。すらっと長く伸びた足は、漆黒のズボンと上手く調和がとれている。

元いた世界でも、この男の様に奇怪で、おどけた姿の者は稀だったろう。

『ロマヌエツト、どこに行く？』

突然、右肩に乗っていた鳥、とぼけたような表情の鸚鵡オウムが、主人である男の名を呼んで、訊ねた。この鸚鵡、何が奇妙かと言うと羽が赤から青のグラデーション、もっと簡単に言えば、虹色をしているのだ。

「街を目指していますよお」

ロマヌエットと呼ばれた道化は、カタコトと口を動かしながらそう言った。

街があると確信しているあたり、どうやら彼も『世界』内部の事情を知っている者らしい。まあ、訪れる客人は往々にしてそういうものなのだ。

逃げ出した犬頭を目で追いながら、上機嫌に鼻歌を歌って何の迷いもなく歩き出す。

「パロは食べたいものありますかあ？」

『肉ーっ、肉ーっ』

極彩色の鸚鵡は羽をバタつかせながら、金切り声のような絞った声を張り上げて主張した。

「なんの肉ですかあ？」

『肉ーっ！肉ーっ！』

ロマヌエットとパロの会話は成り立っていない。しかし、本人たちだけで通じる何かでもあるらしく、お互いに発言に対しての質問を投げかけたりはしなかった。

草原の雰囲気にならせた鼻歌はやがて、高音域に達する。その時、ロマヌエットは純白の手袋を装着した両手を重ね合わせて、どこから取り出したのか、ポンツと弾けたような音とともに鳩が三羽飛び出した。さらに、次にその手を見みるとそこには黒いステッキが握られている。

その奇怪な姿に相応しい、奇術だった。

今しがた手に持ったステッキをヒュンヒュンと勢いよく回して、道中を楽しんでいるようである。

「んー、さすが『世界』と呼称されるだけのことはありますねえ。

本当に一つの世界がそのままダンジョンになったかのようですよあ

『デスヨオ、デスヨオ』

誰に言うわけでもなく、余裕たっぷりの奇術師はつぶやく。

そこで、鼻歌が止んだ。

「パロ、お客さんですよあ」

『お客うつ、お客うつ』

奇術師の眼が、剣の切っ先を捉える。

＋＋＋＋＋

ターニャ・チャルネ・ライデンワーツは途方に暮れていた。

食糧もない。水もない。街もない。目の前に広がるのは広大な大草原だけ。装備品は兜も鎧もなく、あるのはただ一つ、ライデンワーツの国に伝わる宝刀だけだった。唯一の頼みの綱である宝刀であるが、勿論食べられるものではないし飲める代物でもない。空腹と渴に対しては、何の役にも立たないものだ。

ライデンワーツ国の『世界』進入から一週間程度だろうか、ターニャは自分の護衛に当たっていた者の謀反行為によって命からがら逃げたわけなのだが、僅かばかり所持していた食料や水分は今日ですべて使い切ってしまった。絶体絶命の危機である。

だからこんなくたらないことしたくなかったのよ！

口からそんなことを言う気力も失せかけていたが、心の中でそれだけは思うことができた。

空を見上げると、真上から太陽が自分を照りつけ、見下ろしていた。

風が横を通り過ぎるたび、嘲笑うかのようにターニャのセミロングの金髪を撫でていく。

顔には憔悴が色濃く見られるが、それでもキリツと美しくも凜とした両の眼だ。今は辺りを警戒しているためか、非常に鋭くなっている。見るものを安眠へ誘うような碧色をした瞳が左右に忙しなく移動していた。

高貴そうな紅いローブは、すでにいくつかの戦鬪の所為で破けたり泥がついたり散々だった。ターニャが動きやすくしようという

ことで、ビリビリと思い切りよくいったのも原因だが。

せめて、誰か通りがかれば。その人から食料と水を少しでもいいから、分けてもらえれば。

もう何度目かになるその願いを引つ提げて進む足取りは、どこか重たい気がした。

あるいは、宝刀を抱えているせいかもしれない。しかし、これを手放すと本当にその身一つとなってしまうので、迂闊に捨てることもできない。

ターニヤはこのどうしようもない危機に直面して、深く深く溜息をつく。

そもそも、自分は王族の生まれで永遠に贅沢をして暮らせる身分にあったのだ。向こう側にいるときにはそんなことを考えたこともなかったターニヤだが、今は空腹と喉の渇きにやられているせいで豪勢な食事やゴブレットに注がれるワインなどを想像してしまう。

それが昔、と言っても一週間程前だが、その時は当たり前の生活だったのだ。それが、父に当たる国王の『世界』進入計画の所為で脆くも崩れてしまった。結果、自分は今こうして生死の狭間を彷徨うことになってしまったのだ。そのことを考えると、怒りが沸々と込み上げてくるのを感じる。

国を挙げてダンジョンに突入し、『宝具』を以て世界に幸福と平和をもたらして見せるという大義名分を掲げていた父君は反逆者の凶刃に倒れ、娘である自分はこうして死にかけて生きている。

あいつらは最初から、これを狙っていたんだわ。

そうと気づいた時にはもう遅かったのだが、ターニヤは憎らしい敵の姿に復讐を企て始めていた。

父は、心やさしいお人だった。とある一戦にて、妻を亡くした父は平和に対する思いを一層募らせた。ダンジョン突入の際に掲げた大義名分は嘘偽りのない本音だっただろうし、いつだって国王としてではなく、父親として接してくれた。母親を早くに失った自分としては、頼れる唯一の人だったのだ。

ターニヤの目じりにうつすらと溜まるものがあつた。それは手に拭われて、すぐに乾いてしまう。

くよくよしても仕方ない、とにかく、生きよう。そしていつか必ず復讐してやる。

そう胸に誓って、ターニヤは勇んで足を踏み出す。

フンフン、フン、フン

ターニヤが第一歩を踏み出した瞬間、全くの同時にそんな鼻歌が聞こえてきた。

え、これって……。

ターニャの眼に動揺、驚愕、そして殺気が籠る。

これは、たしか、あの時に聞いた、歌。

目に映ったのは、ステッキを振り回す奇術師。

この歌は確か……。

見たこともないような格好で、上機嫌な長身の男だ。

あいつらが、賛歌として歌っていた、曲？

ターニャは自らの父親が殺されたとき、下卑た声がつっていた音を思い出す。

気づくと、ターニヤの体が奇怪な男に突進していた。

†
†
†
†
†

「はい捕獲」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア
アッ！」

先に街に入っていたと思っていた青年が、急に目の前に現れて両手首を掴まれた。しかも片手で。アイリの声は半分断末魔の叫び

となっており、出現した青年の鼓膜を劈く。

青年の眉間に皺が入り、不快なのを顔に出した。

「うるさいっ！」

「ごめんなさい！」

青年が一喝すると、アイリは断末魔をしゅんと収めて縮こまる。

とはいっても両手首をがつちりと掴まれているので、セクシーに体を振るだけの結果となってしまうた。

「ごめんなさい離してくださいお願いしますっ！」

涙眼を零しそうになりながら、アイリが懇願する。傍目には、年端もいかない少女を襲っている青年の図だったが、青年は大人しくその手を離して、

「なんで俺の後を付けてきた」と聞く。

アイリはばれていたことに驚きを隠せず、目を合わせるのも困難になるほど動揺する。そしてこれは困ったことになったと冷や汗が背を伝った。

「え、あ、のですね、私、街、行きたい、から、来た、付いて」

しどろもどろになりながら、実にわかりやすい単語繋ぎの文を口から吐き出す。青年は不思議そうな顔をしてその様子を眺めていた。自らの失敗をそれにて悟り、アイリの思考が羞恥心と焦燥感で爆発しそうになる。簡単に言うところの、『馬鹿』の状態である。

「要するに、街へ行きたかったが方向がわからず、その辺を適当に歩いていた男を見つけたから、それに付いていけば街へたどり着けるだろうと思って付いてきたわけだな？」

「そ、そうですそうです！」

「全く、顔が可愛いから付いてくるのを許してやったようなものだぞ！ 感謝しろ！」

「あ、ありがとうございます！」

青年が補足してくれたことで会話が円滑に進んだ。それに対するお礼も含めて、ペコペコと頭を下げる。頭を下げながら、そういえ

ば一回もこちらを振り返らなかったのに顔のことを言われたのはなぜだろう、と疑問に思った。

「お前名前は？」

「あ、アイリです」

「そうか、俺はアルス。よろしくな」

相好を崩して、アルスという青年が頭を叩いてきた。乱暴ではあったが、不思議と嫌な気分にはならない。そればかりか、どこことなく安心感を生みだすほどだ。

「もう街に着いたから安心だな、それじゃ」

パツと黒衣を翻し、立ち去るアルス……「ちよつと待つてくださいよっ！」「な、なんだ！」を、アイリは必死の形相で止めた。

「私ほとんど丸腰で食糧だつて尽きそうですし、水もカラカラなんです！ 今放つておかれたらいずれ死んでしまいます！」

「何が言いたいんだ」

「私もご一緒させてください」

アイリは一生懸命になつて腰を折った。

武器となるようなものは、ないこともないが玩具のようで当てにならない。食の問題も今述べた通りであり、ほとんど死にかけだった。しかも、今では珍しい職種となつた魔法師だが、それも見習いでまだまだ初級の魔法ですら使いこなせていない始末である。こんな非力な少女を一人残しておくとうなるかは火を見るより明らかだろう。

アルスの困つたような溜息が聞こえる。

「あのなあ、たしかに俺は今日進入したばかりで食料も水もたんまりとあるが、二人分を養うとなるとキツイ。だから無理だ」

「お、お願いします！ 荷物持ちでも料理でもなんでもしますから！」

アイリの声は真剣そのものであり、それが今だけの協定ではないことを裏付けていた。

アルスの溜息に、困惑が色濃く混じる。

やがて決断したのか、息を吸い込む音も聞こえた。

「言っておくが、毎食たらふく食えると思うなよ」

「あ、ありがとうございますっ！」

アルスが歩き出すと、アイリの姿がそれを追いかけた。

＋＋＋＋＋

決着はあっさりついた。

「剣術に長けているようですが、私には通じませんねえ？」

くぶくぶと、気味の悪い含み笑いを抑えきれないように声を漏らしながら奇人は言った。

「いきなり命を狙ってくるだなんて、あなた、何者ですかあ？」

神経を逆なでする語尾の伸ばし方だ。ターニヤはそれに毒づきながらも、両手に手錠をされ、背中にどっかり座られているので反抗することすら叶わない。

剣は確かにこの男を捉えたはずだった。しかし、その姿は幻影にと溶けるように消え失せ、気づいた時にはこの態勢を強いられていた。全く、何がどうなっただろうか見当もつかない。ターニヤの美貌に苦々しさがありありと滲む。

『ロマヌエツト、肉うつ！』

ロマヌエツトと呼ばれた男の肩越しに、キンキン喳喳しい声を張り上げる鳥が恐ろしいことを言う。自分を食べるつもりだろうか、と覚悟を決めるところだった。

「人の肉は不味いと聞きますから、それはやめておきましょうねえ。代わりに、彼女から美味しい情報を引きずりだしてしましましょう。肉汁みたいだねえ」

またもくぶくぶと笑んで、ターニヤはゾツとする。

この男は危険だ。

今更のように気づいた自分が心底恨めしかった。もう少し冷静であれば、この男の纏う不気味なオーラに感づくことも出来ただろうに。頭に血が上っていたせいで冷静さを欠き、このような結果を招くに至ってしまった。自分とはんだ間抜けだ。

ターニヤは自己嫌悪しながら、どうにか逃げる術が転がっていないかと思案する。碧の瞳は草むらの間を駆け巡り、一つでも自分の力になりそうなものを探そうと躍起になっていた。

「質問です」

背中に少し体重を掛けながら、その拷問を楽しむようにロマヌエツトが発言する。

「あなたはライデンワーツの方ですよねえ？ 眼の色から判断すると、王族と言ったところでしょうか。そしてその二十歳くらいの年に見える顔。ライデンワーツ国王の娘といったところでしょうか」
質問などと言いながら、憶測で真実を暴いていく奇術師。

今ロマヌエツトが述べたことは紛れもない真実である。まあターニヤ自身は二十歳じゃなくて十九歳だと強く主張しているが、それも心の中だけなのでくぶくぶ笑う男には認識されない。

「あなたは、ライデンワーツへ反逆した輩の正体を知っていますか？」

ここからが本題だとしても言わんばかりに、言葉に強みが籠っていた。

ターニヤは首を横に振る。

ロマヌエツトの微笑が少しばかり、崩れた。しかしそれも一瞬。すぐに元の表情に戻る。

「そうですか、でしたらもう用はないです。お疲れさまでしたあ」
ロマヌエツトが掛けていた体重から解放された感覚、とともに手を封じていた錠が外れた。

一体どういう仕掛けなんだろう。

ターニヤは置かれた状況を考慮せずに、暢気にそんなことを考えた。

「では、失礼」

「あ、ちよつとまって！」

ターニヤが暢気にしているうちに、奇術師が去ろうとしたのであわててそれを止める。

ロマヌエツトが微笑のまま、首を傾げる。

「あ、あなたは私の国の何を知ってるの？ さっき、なんか賛歌みたいなもの歌ってたけど」

ターニヤが素朴な疑問を口にする。

対するロマヌエツトは、うーんと唸るような仕草をした。悩んでいるというよりは、ただ単にこちらを焦らして楽しんでいるという風情である。

「私の目的はただ、あなたの父君を殺したであろう男の始末ですよ」

ロマヌエツトの声は、草原に靡く風の音に余韻として響いていた。

それから奇術師と姫君は、微妙な距離感のまま街へとたどり着いた。

街はまた新たに二人、客人を迎える。

始まりの街にて

朝が来る時には太陽が昇り、夜が訪れれば月が顔をさらす。

天体という細かな点まで再現されたダンジョン、『世界』へ進入すると、まず初めには草原があつて、それを抜けると次には街が現れる。

その街は、途中の草原で力尽きたもの以外は確実に通り、かつ初めに訪れる街ゆえにこう呼ばれる。

『始まりの街』と。

＋＋＋＋＋

このダンジョンに入ってから二日目の朝を、アルスは固い木の板の上で迎えた。窓から差し込む陽光は、眠っている間ずっと閉ざしていた眼を容赦なく刺激し、しかめつらを強要する。アルスも眩い朝日には勝てないらしく、眼を細めて猫のように背を丸めていた。

薄眼を開ければ、ベッドの方で寝ているのは水色の美少女。

昨日、自分を尾行していて成り行きから共に旅することになった少女だ。名前はアイリというらしく、普段は青色のベレー帽を被り、純白のワンピースに身を包んでいる。

寝顔を覗いてみると、これはまた無防備なものである。

ふにふにと柔らかそうな頬、唇。そして呼吸に合わせて緩やかに上下する華奢な肩。あともう少しのラインでパンツ見えるんじゃないかと思うくらい、ワンピースの裾からはみだしたすらりと白い足。アルスにしてみれば、アイリのワンピースの裾は少し短すぎるんじゃないかと思うほどだった。無論、それでグッドだとかなんだと

か言っているわけではあるが、それにしても短い。普段穿いているニーソックスは入浴の際に放つて来たらしく、今は素足だ。だからなんだと言い聞かせるアルスであった。

アホなこと考えてないで、顔でも洗ってくるか。

ひとつ大きな欠伸をしてアルスは立ち上がり、勝手に寝泊まりしている宿の庭に備え付けられている井戸まで歩いて行つた。そこまで行く途中、ふと視線に入ってきた鏡を見てみると寝癖が大変なことになっているのに気付く。

そして、庭までやってきてもう一つ視線に入ってくるものがあつた。

人だ。しかも二人。

片方は男、もう片方は女だった。

男の方はやたらガタイのいい三十代くらいのおっさん。サンングラスをしていて髭が濃く、彫が深い顔立ちだった。筋肉で盛り上がった肉体をスーツでパリッと収め、見方によっては本職の方々と間違えそうな姿をしている。

対する女の方は、年はまだ十代半ばくらいに見える子供だった。

麦わら帽子をかぶり、どこかの令嬢然とした雰囲気を漂わせているが、一際人目を引くのはその女の子が車椅子に座つていているということと、その眼がずっと閉ざされたままであるということだった。クリーム色のワンピースがよく似合う綺麗で小柄な子であったが、とても十代とは思えないほど超然としており、アルスの眼にはただの子供という風に映らなかつた。

朝ということで、やや冷涼な風が吹くと少女の長い髪の毛がそれらに弄ばれる。麦わら帽子も飛びそうになっていたが、それは少女自身が押さえた。

「カイン、どなたですか？」

「知らない男だ、ミル」

気配を消していたアルスの方に気づいたのは、カインと呼ばれた厳つい男の方ではなく、麦わら帽を被つた眼を瞑る少女、ミルだつ

た。眼でみたわけでもないのに感覚だけでアルスの存在を発見したのである。それだけで只者ではないということが証明された。

アルスは警戒を露わにし、気配に殺気を紛れ込ませる。

「私はカイン以外の男性に興味はありません。行きましょう」

「俺もミル以外の女には興味がない。行こうか」

しかし、車椅子に腰かける少女とそれを押す男の方はアルスのことなど気にもかけていないように平然と去っていった。

「私たちは愛の力で結ばれているんですね」

「ああ、愛の力は無敵だ」

最後の最後に世界の気温を三度くらい上昇させそうなことを言っていたが、アルスは無視した。

というよりも、あの二人のことが気にかかったのだ。

どう見ても、『普通』ではない。それは確かだった。

特にあの盲目の少女の方。彼女は得体のしれない何かを隠し持っている。

アルスはひそかに『世界』の住人に対して警戒心を抱きながら、井戸端まで寄る。

水で顔を洗うと、今まで判然としなかった思考が冴えてきて、アルスの視界を明るくする。

しばらく水に顔を浸したりなどしながら、アルスは洗顔を終えた。

「ど、どこ行つてたんですか！」

アルスが自室（仮）に戻ると、眼に湿り気を帯びたアイリが駆け寄ってきた。シーツを抱えたまま走ってきたせいで、危うく転びそうになる。アイリはとにかく、見ていだけで危ういのだ。

「顔洗って来たんだよ」

アルスが何気なく答えると、アイリの口からはあからさまなまでの安堵の息が漏れ出た。

「よかったです、私、見捨てられたのかと不安になっていました」

照れくさそうに頬を染めながら言うのだから、さしものアルスと言えど気恥かしさを覚えずにはいられない。今こうしてもじもじしているのが豚の顔をペースト状にして、素人が人間の形を取ろうとした結果失敗したような稀代のアレならばこんなトキメキみたいな瞬間はあり得なかっただろうが、相手は如何様な美女でも複雑な表情にさせるほど見眼麗しい美少女である。表情の変化一つ一つがそれぞれ宝石のようなのだ。

「見捨てるわけないだろう、昨日約束したんだから」

アルスがそれとなく言うと、アイリの顔に光が灯ったように明るくなった。

「うれしいです！」

う、うおお、そんな勢い込んで言われても……、とたじろいだアルスだったが、悪い気はしない。

誰かに喜ばれて嬉しくない者は基本いないからだ。

特に相手が美少女となると、喜ばれるだけでこちらが幸せになるような錯覚さえ味わう。

「とにかく、お前も顔を洗ってこい」

部屋に備え付けられていた椅子に腰かけながらそう促す。

しかし、数秒経つても返事が一向に返ってこなかった。さすがに怪しく思い、アイリの方を見る。

アイリの眼には、期待と懇願が入り混じっていた。

察しのいいアルスは、ははあん？ と事情を推測する。

「もしかしてとは思うが、付いてきてほしいとか言うんじゃないだろうな」

「そのもしかしてです……」

予想通りだった。

「アタイも鈍ったもんだねえ……」

そう言って、女は傷だらけの体を見下ろした。

先ほど喧嘩をした名残はまだジクジクと全身に広がるうとしていくかのように痛み、刃物で削がれた二の腕からはまだ生々しい血と、それからピンク色の肉が傷口から覗いていた。はつきり言って、かなり痛々しい姿である。

女性にしてとある海賊団の船長を務めていたこの人物は、昔から好奇心が旺盛だった。『世界』という最高級の謎の話を聞いた時も熟考などせず、団員の連中とともに中へやってきたのだ。

その結果が、この怪我に繋がった。

船長、リフ。それがこの女性の名前である。ポニーテイルが特徴的な紅い髪を持ち、健康そうに焼けた肌が小麦色に輝く自称『海の女』。タンクトップを巻き上げてヘソを出し、下はダメージジーンズで決めるというワイルドな格好だ。

そんな彼女が今日、痛々しい傷を無数に負っているのは団員の連中が関連している。

ダンジョンへ何の警戒もなく入ってきたリフ達海賊団は、その日のうちに数名の犠牲者を出した。あのシャギーテイルにやられたのだ。また、一日で街へたどり着ける者は極めて稀で、リフ達が街へ辿り着くにはなんと一ヶ月も掛かったのである。

そして、辿り着いたときによく団員の不満が爆発した。それがリフへの暴力、また追放へとつながったのだ。

散々罵られ、攻撃されたリフは満身創痍で街へ吐き出されたというわけである。

「ああ畜生、あいつら手加減つてのを知らないんだから」

よろよろと左右の安定しない歩き方で、事情を知らない人間が見たら酔い潰れたねーちゃんがふらふら歩いているという認識だっただろう。それほどまでに、今のリフの足取りは危うかった。

もう夜も明けて朝日が昇りだしているというのに、リフはまだ昨

日の夜から始まった喧嘩の空気が冷めやらないように体中が熱を帯びていた。傷のせいもある。

アタイって、船長の資格なかったのかねえ。

あまりに自分の姿が居た堪れないので、リフは自虐的に笑う。本人はきちんと船長としての責務を果たしてきたつもりなのだが、所詮『つもり』。もしかすると、団員にはその熱意が伝わっていなかったのかもしれない。人から完全に信頼されるというのは、非常に難しいことなのだ。

これからどうするかも分からないまま、リフの足取りは重たい。ふと顔をあげると、そこには宿の様な建物があった。

ああ、ちよつとここで休憩していこう。

リフはそう思って、俄然進む気力が湧いてくるのが感じられる。正面口から入って、建物の玄関へ進む。するとそこで、視線を感じた。

今までの経験から、この視線が敵意をもったものだということを即座に悟る。

腰に装着していた短剣を眼にもとまらぬ速さで取り出し、視線を投げかけてくる者の首元へ……。

と、思ったのだが、現実と予想は全く異なるものだった。なにせリフは満身創痍のよれよれ。素早い行動など出来るはずがない。案の定、やつとこさできた行動といえば短剣を抜くくらいのものだ。しかも持つ手は痛みで痺れ、プルプルと小刻みに震えている。

「……なんだ、大したことなさそうな奴だったな」

精悍な顔つきの青年が動じる様子もなく、敵意をむき出しにしてしまった自分を見据える。隣には驚いた様子でやたら可愛らしい顔つきの少女がおり、どう見ても自分の置かれている状況は不利以外の何物でもなかった。

「おいその小物を仕舞え、したら命は助けてやる」

「アルスさん言い方に気をつけてくださいよ！ あ、私たちに敵意はありませんから、どうかその短剣を収めてください。あなたの

治療をします」

あれ？ 敵意ないの？ と一瞬毒気を抜かれたリフであったが、そんなうまい話はないと思い返し、再び二人を睨む。

「しつこい、アイリが優しく言っている内に大人しくしないと俺が斬るぞ」

「アルスさんっ！ 本当に、私たちに危害を加えるつもりなんてありませんから。怖いことを言うアルスさんだって本当は心やさしいお方なんです」

必死に訴えかけてくる少女は、隣に控える男まで庇護している。

ああ、この子も一生懸命なんだな。

リフは自分が学んだように、人に信頼されることは難しいということを今一度思い返した。

もしも、もしももう一度だけチャンスがあるとしたら、今度は信頼してもらえるかな……。

目の前がうるんで、二人の姿が極端に見えにくくなる。

リフの手から、短剣が滑り落ちた。

＋＋＋＋＋

「ところでどうして私についてくるんですか？ ライデンワーツの姫君」

『ヒメギミっ、ヒメギミっ』

「その言い方しないで」

「どうしてです？」

「私の名前はターニャ。ライデンワーツは関係ない」

『ナイっ、ナイっ』

「姫君なのにですか」

「なんだっていいじゃないっ！」

ロマヌエツトとの埒が明かない会話をしながら街を彷徨うこと数時間。ターニヤはそろそろ真剣にこの男の元から姿を消そうかと考え始めていた。パロとかいう鸚鵡の復唱もターニヤの機嫌を大いに損ねる原因の一つとなっている。しかしそれでもロマヌエツトの元を去らないのは、まだライデンワーツとの関係を詳しく聞いていないからだ。裏切り者への復讐を果たすためには、如何なる小さな情報でも仕入れておかねばならない。

ターニヤは口が軽そうで、しかしその実、どんな宝箱よりも堅固なロマヌエツトの性格を早くに見抜いていた。しかしそれが却って、まだ先は長いと気持ちを落ち込ませる要因になっている。

こんなことでへこたれてちゃいけないんだけど。

自らを鼓舞しなければギブアップしてしまいそうだったが、元来ターニヤは我慢強い性格だ。この程度のことでは負けない。

「ねえお願いだからライデンワーツのこと教えてよ」

「アムルザルド大陸北方に位置する大きさとしては中くらいの国で気候は寒冷、また鉄鋼や銀といった鉱物がよく採れることで有名。

さらに「誰が国の説明を頼んだのよ!」「ノヨッ、ノヨッ」

「ええ? こういうことではないんですかあ?」

「説明される以前から知ってること話されても困るから」

「ではライデンワーツに伝わるおとぎ話を……」

「『極光の姫君』の話でしょっ! 誰でも知ってることじゃないっ!」

ターニヤがキンキンと甲高い声を上げながらロマヌエツトを批難する。当の本人はそんなターニヤの反応を見て何が楽しいのか、肩をゆすって笑っている。

ちなみに今話に出てきたおとぎ話は、『魔王』がいたころの時代の話の基に創られている。ライデンワーツではメジャーなおとぎ話の一つなのだ。

「ですがライデンワーツという国を説明する上では必要なことだと思えますけどねえ」

「そういう解説はいらないの、私が欲しい情報は父を殺した奴らの情報。あなたは少なからず掴んでいることがあるんでしょう？ それを教えてほしいの」

「パロ」『無理っ、無理っ』『どうですか？ 徹夜で練習したんですよっ』

眼を輝かせて言うな腹立たしいっ！ と顔面を一発殴りたい衝動に駆られて腕がプルプル微振動を開始したが、なんとかそれは抑えた。

こつやつて拒むということは何かをつかんでいる証拠。ターニヤはそれを逃さなかった。

更に追求しようと奇術師の肩をつかもうとした瞬間、その手は突然現れた変なものの所為で硬直した。ロマヌエットは……、全然変わっていない。

現れたのは、鋼の肉体を持つゴーレムのようなものだった。

＋＋＋＋＋

ボサボサのウェーブが利いた白髪をブンブン揺らしながら、ひよる長い男が奇声を上げる。

ウオオオオとも、フォオオオともつかない独特の絶叫だったが、とにかく危なそうな人種であるのには間違いなかった。やたら大きい丸メガネの向こう側には鋭い双眸が光っており、奇声が気にならないロマヌエットのような人種はそこに着眼する。

脳をシェイクするが如く頭を振り続ける白衣の男は、有体に言うところのロボットというものに乗っていた。ただし操縦ではなく、その肩に。

「完、っ成っ！ 吾輩の強く剛健な下僕第十二号『スイエル』！」

スイエルなるそれは、猛牛のような角を生やし、眼が点のように小さい巨体だった。頭部には彼の名前と思しき『ベルデロイ』という文字が書かれている。全身が鋼鉄で作られており、容易に破壊されることはなさそうだ。

しかし、そう思ったのも一瞬だった。

「お、う！？」

ガラガラと、城が大地震によって瓦解するような激しい音。続いて金属と金属が擦れ合う鋭い音が街中に響き渡り、はつきり言うところ近所迷惑極まりなかった。周りに散らかった鉄の山も片付けるのを投げ出してしまうくなるほどで、最早層を成している。

ところで、崩れたスイエルに乗っていたあの男は大丈夫だろうか。呆けたように見ていたターニヤは我に返ると、ようやくそれだけ考えることができた。

しかし、心配は無用であつたのだと理解する。せざるを得なかった。

「いやあ、失敗でしたね」

ケロットと、まるで何事もなかったかのように瓦礫の下からベルデロイがはい出してきたのである。

不死身なのだろうか。

「へえ、こんなところでこんな人物に出会えるとは」

ロマヌエツトが笑みを深くして狂的なその人物を見据える。

「フランケンシュタインと呼ばれる種族ですよ、鋼鉄の下敷きになつても死なないのは種族特有の異常な生命力のおかげでしょう」

「おやおやおや！ 君は吾輩の正体に気付いたのかね！ いやいやいや！ その慧眼に吾輩自ら礼讃しようではないかっ！ ここにあるスイエルの死骸を持って行きたまえ！」

「ですってターニヤさん」

「いりませんよっ！」

全速力でターニヤは逃げた。後ろからロマヌエツトの気配と、それからおかしい科学者の気配がしたが無視した。

なんとか振り切った時、ロマヌエツトが息切れもせず、平然と後ろに立っていたのが少し残念だった。

＋＋＋＋＋

『始まりの街』某所。

そこではライデンワーツの兵が整然と並んでいた。といっても、『本隊』が街の外へ出て先へ進んでしまったがために、残っているのはわずかな兵力の『分隊』だ。

街にはどんな人が集い、やがて扉を開こうとする。

大迷宮、『世界』に備え付けられたゲームは、少しずつ、着実に進んでいた。

点綴

壁に囲まれた『始まりの街』の外へ出ようとするには、『鍵』と呼ばれる特殊な道具が必要だった。鍵を持っていない者は必然、行く手を阻む巨大な門を通過することができない。

今もまた、『鍵』のことを知らない三人組が門の下に集まって騒いでいた。

「だあかあ！ 扉を破壊するのが一番効率いいんだってっ！」
と、三人組の中で赤い髪をした女の子が叫ぶように言う。

「さっきから言ってるけどどうやって壊すのよ。それよりも地下深くまで穴を掘って抜けた方が断然いいじゃない！」

反論したのは青い髪の女の子だった。同様に、金切り声のように喧しい。

「そんな時間のかかることしてたら『宝具』とられるじゃないの！ それより壁を越えた方が早いんだってばっ！」

さらに意見を述べたのは緑色の髪をした女の子。そろそろ傍迷惑な声の大きさだ。

三人は三つ子の姉妹で、他の人たちと同様に『世界』に『宝具』を求めてやってきたのである。三人の相違点と言えば数えるほどしかなく、赤い髪のアカニヤはツインテール、青い髪のアオノは左サイドポニー、緑の髪のみドリナは右サイドポニーと、若干の髪型の違いか色の違いしかなかった。着ている服もただ色違いなだけで、色さえなければ全員同じように見えるほどだった。

三人の身長は低く、見た目だけで判断するのなら十代前半に見える。実はこう見えて実年齢は十八なのだから驚いてしまう。

「壁なんて越えられないでしょ！ ジャンプでもするってのっ!？」
「破壊的な方法よりは現実的でしょうが！」

「やっぱりここは地面掘り掘り計画でしょう！」

「時間かかるって言ってるじゃない！」

「破壊的な方法よりは現実的でしょうが！」

「また言われたっ！」

「それだけ無茶なのよ地面掘るのと同じくらいにね！」

「壁を超えるだなんてのも非現実的だけどね！」

「それを言ったら全員の意見がそうなるじゃない！」

「じゃあ新しいの考えなさいよ！」

「そもそもこの扉ってどうやって開くのよ！」

「あの鍵穴が見えないのっ！？ まあアタシも今見つけたんだけどね！」

「鍵！？ 鍵なのね！？ じゃあここで所持者を襲えばいいんじゃない？」

「グッドなアイデアだけど時間かかるかもしれないでしょ！」

「じゃあ自分たちで探せってこと！？」

「そうなるわね！」

声だけを聞いていると、途中で誰が誰だがわけが分からなくなってしまう。全員一様に同じ声で叫ぶため、全く聞き分けられないのだ。

やたらと高音な金切り声は、扉の前に集まっていたどこかの国の軍隊然とした兵士たちの表情をどんどん曇らせていく。聴覚に働きかける毒のように甲高く、かつ耳障りな声の持ち主たちだった。耳を劈く彼女らの絶叫に似た会話は、兵士たちをどんどん疲弊させていく。

そんな兵士たちの様子を危惧してか、部隊の隊長がその三人に進み出た。

「おい、その三人組！ うるさいぞ静かにしろっ！」

「鍵はどこにあるのよ！」

「そんなのも分からないの！？ 道行く人を脅せばすぐ吐くでしょう！」

「キヤハハじゃあ早く捕まえましようよ！」

部隊長が怒鳴ってもその声はすぐに三人組のかしましい声に吞まれてしまった。しかも会話の内容がひどく生々しい。部隊長が一步、後ずさる。

言つまでもないことであろうが、扉の前に整列しているのはライデンワーツの分隊だ。本隊は早々に『鍵』を取得し、先へ進んでしまった。

扉を通過できるのは、一つの『鍵』で一つのパーティだけと決まっている。パーティは扉の前で結成できるのだが、結成のためには一人ずつ扉に認証してもらわなければならないので、手間取るという理由から全十万から成る裏切り者のみで編成された軍隊は五万の本隊と、二つに分割した五万の分隊とに分かれたのだ。

今、扉の向こうへ渡つたのは本隊ともう片方の分隊。残つたこの部隊だけが、いまだ街に取り残されているのだつた。

「ねえねえおっさん！ あの手を開ける鍵の在り処教えてっ！」

「言わないと鼻の穴に爆竹詰め込むよっ！」

「言わないと髪の毛の代わりに画鋲を沢山埋め込むよっ！」

二万五千の分隊の端、千人単位で一個の部隊を編成しているのだが、その部隊長は三人組のあながち嘘とも思えない脅迫に恐怖を覚える。ただ、本人は髪の毛があまりない方なので画鋲の方は苦しみが少なくて助かると安堵していた。そういう問題ではない。

「ほら早くう！」

アカニヤが部隊長の脛を蹴りだす。見かねた一人の兵士がそれを止めようと近付いた瞬間、青い閃光がその兵士の顔を横から二等分にした。顔の筋肉や脳が露わになり、口元がなおもぱくぱくと魚みたいに動いていたがやがてその場にどしゃつと倒れた。顔の上半分はワントンポ遅れて地に落ち、脳の半分や薄茶色っぽいドロドロした液体をまき散らした。その断面はあまり見たいものではなかったが、見れば綺麗に切断されており、皮膚がささくれだったり頭蓋骨にヒビが入ったりということすらなかった。

部隊長を含め、兵士に戦慄が走る。

「早く言ってくれないと、みんなこっするよお！」

アオノの手に握られた刃となつた鉄輪、チャクラムが青白く発光する。

＋＋＋＋＋

今まで車椅子を押していた手から力が抜かれ、だんだんと減速していく。盲目で眼をずっと閉じたままのミルは屋上に出て来て、その頬を風に撫ぜられていた。風は涼しく、気持ちがいい。それに加えて背後にカインが立ってくれているのだから、今のミルは充足感に包まれて幸せだった。

ああ、愛の力は素晴らしいものですね……。

一人、恍惚に浸りながらふふふつと微笑む。それがカインに聞こえたのか、カインの声がした。

「どうかしたか？」

「いえ、今の私は幸せだなあつと」

「そりやそうだろう、俺が付いているんだから」

「その通りですね」

クスクスと笑みながら、実に幸せそうだ。

「そろそろ『鍵』の争奪戦が始まるころでしたよね？　こんなところで幸せにしているのでしょうか？」

「ああ、もうすぐ戦闘になるから、今だけの平和を噛みしめているんだ」

セリフの割には、カインの表情には穏やかな笑みが浮かべられている。ミルの方も大して心配していないといった風であり、二人揃

って和やかな雰囲気を作り出していた。

「今回、『鍵』はいくつくらいでしょう？」

「俺とミルが来たときに始まっていた争奪戦では、確か五つという情報だったな」

時折忘れてしまうことであるのだが、今人々がひしめいているこの空間はダンジョンである。いくら特殊な点があるといっても、基本的にはほかのダンジョンと同じなのだ。故に、自然と人が攻略できるようになっている。

ある特定のエリアにおいて鍵がいくつか発生するのは、『世界』というダンジョンを攻略できるように仕組まれたことなのだ。

街やダンジョンが組み込まれたこの大迷宮は人工のものだろうと多くの者が暗黙のうちに理解していることである。次へ進むために何かが仕組まれているとは、誰しもが分かっていることだった。

ミルとカインが初めてこの街に足を踏み入れた時、すでに争奪戦が始まっているという噂が広がっていた。それで二人は『鍵』についての事情を少しばかり掴んでいるのだ。前回は着いて間もなく、しかもすでに敗者が帰ってきていたころだったので奪う気力もなく、争奪戦に参加しなかったのだ。

だが、今回は違う。

「ああ、ライデンワーツの最後の分隊も整列しているようですね。戦いが本格化しそうです」

「そうみたいだな。聞いた話によると、『鍵』を所持しているのは大型のモンスターとのことだ。ミル、気をつけるんだぞ」

「カインと一緒にないと私は死にませんよ」

「そうだったな、俺もだ」

カインの仏頂面はどこへ行ってしまったのか、今の彼の表情はサングラスをしていながらも穏やかなものだった。後ろへ流した黒い髪の毛が、風で更に追いやられる。

二人のカップルは屋上にて、その時を待つ。

＋＋＋＋＋

アイリはリフの手当てをした後、彼女の突然の行動に驚愕した。両手を地に着けて、頭を深々と下げる。いわゆる土下座という行為だ。

「あ、頭をあげてくださいリフさん！ 私はそんな恩を着せるとかの目的ではないのですから！」

「このご恩一生忘れませんっ！ アタイはアイリさんに付いていくと決心いたしました！ どうぞよろしくお願いしまっすっ！」

強引にもリフがそんなことを言う。本来プライドが高いはずの海賊がこんなことをするのは、アイリの優しさに本当に胸を打たれたからだ。リフは伊達や酔狂でこのようなことはしない。

リフの態度に、初めに反応したのはアルスだった。

「あのな、アイリを世話してるのは俺だ。それにまた金魚のフンみたいに付属物が付いてこられたら俺が困る」

「そんなこと言わないでそこをなんとかあつ！」

「アルスさん……」

腕組をして部屋の壁に寄り掛かるアルスは、アイリの困惑した視線を見ないようにしながら考える。

まず、このダンジョンにおいてパーティを組むのは確かに利益にもなるが、ずっとの付き合いとなると話は別だ。進行を共にするということはお互いを信頼しなければならいし、食事などといった問題も浮上してくる。

パーティを組むのは、一時だけの方が利口と言えるわけである。「アルスさんお願いですっ！ この通りっ！ 狩りでも荷物持ちでもなんでもするからっ！」

あれ、これと似たようなセリフを前にも利いたぞ。とデジャヴの

ような現象を味わいながら、アルスの唸る声が低くなる。

そして、思いついたようにハツと顔をあげた。

「そうだ、お前は狩りとか採集で食糧を調達する係にして、アイリはそれを調理する係にしよう。当然、俺はその護衛だ」

今のセリフからアルスの狙いが分かっただろうか。

つまり、アルスが言うところにはこういう意味がある。

俺の食料は放っておくといずれ尽きるから、今まだそれがあるうちに役割を分担しておいた方が後が楽になる。幸い、二人は俺の養えるところにも限度があるとは疑っていないからこれを機にそれを利用してしまおう。今ここで係を割り当てておけば、食糧が尽きた時にもこのままでいれる可能性が高くなって食事には困らないだろうし、自分には都合がいい役目を与えておくことですごく楽になる。

という内容だ。

当然と言っべきか、アイリとリフはアルスの下心にも気付かずに大喜び。

その様子に少しだけ罪悪感を覚えるのであった。

その時、街の広場の方だろうか。

ガラガラと何かが崩れるよううなるさい音がこだました。

＋＋＋＋＋

走っているときには主に後ろに注意を払っていたせいでまるで気がつかなかった。

ターニヤは見覚えのある鎧の軍団を前に、体を硬直させる。

黄金色を輝かせる豪華な鎧を纏う軍団は、見間違いようもない、ライデンワーツの兵隊だった。今はやたら大きい青く錆びた扉の前

で整列しており、幸いと言うべきか自分の方には気づいていないようだった。反射的に身を隠してしまう。

「ああ、あなたは追われているんでしたねえ」

まるで他人事のように鼻歌交じりにロマヌエツトが言う。今のターニヤには、ロマヌエツトの様な余裕が腹立たしく感じられた。

ざっと見渡しても、何人整列しているのか数えることもできない。「大体二万ちよつとくらいでしょうかねえ、ターニヤさん、最初のころはどれくらいの兵数だったのですか？」

驚いたことに、ロマヌエツトが正確とまではいかなくとも、近い数字を当てた。

ターニヤは底の知らない奇術師に不気味さを覚えながらも、ダンジョン進入前日あたりに聞かされていたその数字を思い出す。

「確か、ライデンワーツ国の防御にも人を当てていたから、全軍四十万のうちから三十万だけ連れて来たって聞いたけど」

「ほう、反逆者の数は大体半分くらいでしょうか？」

「ううん、大体三分の一くらいに見えた」

「ではおよそ十万の軍団から、本隊と分隊に分けたのですね」

ロマヌエツトの冷静な分析。ターニヤは自分の昂る感情を諭されているような心持ちになった。

「しかも、精鋭だけで組んだであろう本隊がいない上、他の分隊の姿も見られないということは兵力的に一番低レベルなんでしょう」

勝機を見出したとばかりに、ロマヌエツトの微笑が深くなる。パロモ今は大人しくしていたが、小声で『ザコつ、ザコつ』と繰り返していた。

ターニヤは少しだけ怯えていた自分を励まされているような気分になって、ロマヌエツトに対する見方が少しだけ変わる。この奇術師はこういうことになると、なんて頼もしいんだろう。ターニヤの強張っていた表情に軟らかさが取り戻され、笑みさえ灯る。

その時、ターニヤは隠れていたせいで気づかなかったのだが、ロマヌエツトの眼にこちらへ走ってくる三人組の姿が捉えられた。

「あ、ちょうどいいやあ！　その人お、たーすーけーてーっ！」

＋＋＋＋＋

スイエルの後片付けもしないまま、肩を揺らして笑う怪しい男、ベルデロイがぶつぶつと呪文のように何かを唱えている。

「うーむ、動力には吾輩の魔力と『金剛牛』の心臓を導入し、筋肉として極太ワイヤーを使用したり神経の代わりに導線を使ったりしたのに……、いや、もしかすると皮膚の部分が重たすぎたのですか？　しかし初めのうちはきちんと機能していたし、それでも崩れたということとは……、崩れた？　つまりそれは体を支える軸に問題があったから？　ああ、つまりきちんとバランスが取れていなかったということですかね？　四本脚にすることでバランスをとりやすくしたつもりですが、吾輩の過信だったということですね。鉄鋼をやたらつけたせいで重量が許容範囲外にまで跳ね上がり、結果崩壊を招いた、といったところでしょうか。では次からはやたら重くせず、かつ強靱にしなければいけないですね。な・る・ほ・ど！」

何やら一人で納得したらしく、ベルデロイの怪しげな笑みは凄絶を極めていた。

吸血鬼、狼男と並んで、無尽蔵に近い生命力の高さを誇り、危険視されるマッドサイエンティスト。かつ人造人間のフランケンシュタインは、正確には『フランケンシュタインの怪物』と呼ばれる種族であるが、固有名詞を持たない怪物であるがゆえに、そう呼ばれることが少ない。代わりに定着してしまったのは、略称としての『フランケンシュタイン』だった。

そんなフランケンシュタインであるベルデロイはしかし、伝承どおりの醜さをもっているわけではなかった。それは、科学以外にも

魔法という力が存在するこの世界においてのみあり得ることなのだろう。額に継接ぎがあるだけで、あとは怪物の姿をしておらず、人間そのものだった。

だからであろう、普通に話しかけられたのは。

「あの、ここで何かあつたんですか？」

「馬鹿！ 迂闊に人に近付いて行くなっ！」

ベルデロイが振りかえると、そこには解剖して遺伝子を研究したくなるほど愛らしく、小柄な少女が立っていた。水色の瞳がベルデロイを射抜く。

「あ、おいちよつと待てお前解体されたいのかっ！」

その少女は後ろの影のような男に首根っこを掴まれ、猫のように体を縮こまらせながら後退。どうやら少女を引き戻した青年は自分の正体に気づいたらしい。

その眼に警戒の色が宿る。

「お前フランケンシュタインだな。まあそんなのはどうだっていいが、こいつに手を出すと承知しないからな」

「安心したまえ。吾輩はそのあどけない童女を解剖することしか頭がない」

「それが駄目だつってんだよ」

本人としては冗談のつもりで言ったのだが、どうやら青年を余計に警戒させることとなってしまうらしい。青年の言葉には力が籠っていた。青年の隣にいた赤色の髪の毛をポニーテイルに結った女性も警戒を露わにした眼をこちらに向けている。

「冗談ですよ、で、何ですか？ 吾輩に何用？」

「ん？ ああ、さっきすごい音がしたから興味本位で見に來ただけだ」

「ほほう、つまり君たちはこのスイエルの死骸を持ち帰りたいというのだな！ そういうことならば仕方がないですねっ、さあ、どうぞどうぞ！」

「スイエル？ その後ろの鉄塊か？ いるか、そんなガラクタ」

都合よくスイエルの死体を持ち帰ってほしかったのだが、なかなかどうして上手くいかないものだ。

ベルデロイが新たにスイエルお持ち帰り作戦を練っていると、やや近い距離から関とぎの声が聞こえた。青年たちの方も気づいたのか、それに振り向く。赤い髪の女と水色の少女は興味本位で振り向いたようだったが、黒い青年はあからさまに表情が険しくなった。

ベルデロイには興味がなかったために特に動じることもなかったが、青年の事情は違うようだ。

「アイリっ！ リフっ！ ここから出来るだけ離れるぞっ！」

「え、どうしてですか？」 「アタイこれでも一応怪我人なんですけど」

「なんだっていいから早くしろっ！」

両脇に控える二人に青年が怒鳴る。それで二人とも疑問を後回しにして、しゃんと背筋を張った。

「あの建物の屋上だ！ 急げ！」

青年が一つの低層ビルを指差す。

なんとなく、ベルデロイもそれに付いていくことにした。

＋＋＋＋＋

草原では、二匹の魔物が誕生していた。

それぞれ体内には例の『鍵』を宿しており、扉を開けて次へ向かうための重要な役を担う。

街ではその始まりに気づかず、各々の事情に基づいて追いかけてまわしたり、追いかけてまわされたりしていた。

ただ青一色が支配していた草原の上空にはそろそろと厚い雲が集いだし、『合図』を放つための準備を開始する。ゲーム開始の予兆だ。

雲が集い、雷光が閃いた瞬間。
それは、『世界』で起こる『戦争』を意味する。

本戦前の出来ごと

なんでこういうことになるのよっ！

ターニヤは走りながら、この理不尽な状況に憤っていた。

「キャハハ鬼ごっこみたーい！」

「捕まったら殺されるけどねー！」

「キャーキャーっ！」

「わー、楽しいー、ところでどうして私までが巻き込まれているんでしょうか？」

「知らないわよっ！」

すぐ隣を走るロマヌエツトはあくまでも余裕の表情だったが、ターニヤは事情が事情なのでそんな隙もなかった。ターニヤの本名にはライデンワーツという、国名が刻まれている。今自分を追いかけてまわっている兵どもは元、ターニヤの父親の旗下にあったのだが、この『世界』に進入してから謀反を敢行したのだ。ターニヤにとっては敵ではない。

その証明とでも言うように、ターニヤの左脇を走る口やかましい三姉妹を追いかけて来た時、自分と目があつた瞬間に眼の色が変わった。冗談じみた空気が一変、張りつめて殺気が膨張したのだ。

ところでこの三姉妹はどうして追いかけられていたんだらう？

ターニヤはそれが少し気にかかって左を覗いてみる。青髪の女の子が手に持つチャクラムにべつとりと血が付着しているので、それが原因なのだろうか。あるいは、私と同じようにライデンワーツの軍隊と因縁があるとか……。

些か深読みをしながら、後方から轟く咆哮の様な声にターニヤが体を震わせる。

「姫様人気ですねえ」『ヒメっ！ ヒメっ！』

「その呼び方しないでってば！」

「えっ、あなた姫様なのおっ！？」

「綺麗な服頂戴っ！」

「金頂戴っ！」

「私は今無一文なのっ！」

なんて緊張感のない会話だろう、と自分の暢気さに呆れながらさり気なく三姉妹とも打ち解けていることに気がついた。ロマヌエツトのおかげだろうか。

そのロマヌエツトを見てみると、前方に何かあるのか顔はいつものままに眼が細められていた。

ターニヤも前方を見ると、そこには見覚えのある、というか先ほど見たばかりのものがあつた。

スイエルとかいう、奇人の発明品……の残骸だ。

鉄板が山積みとなっており、街路を完全に遮断してしまっている。なんて傍迷惑なっ！ と怒りを覚えたのも一瞬、途端にどうやって逃げようという不安に変質していった。

「邪魔ですねえ、あちらの建物に逃げ込むというのはどうです？」

「そんなところに逃げ込んだらそれこそ逃げ道がなくなるじゃない！」

「八方塞がりってやつ！？」

「逃げ道なーいっ！」

「殺されるーっ！」

「だからといって、軍隊全部は入ってこれませんし、それならなんとか相手できるんじゃないですかね？」

「あ、それいいかもーっ！」

「アンタ天才っ！」

「考えることが一々画期的に爆発的い！」

三姉妹がかしましく意味不明なことを叫ぶ中、ターニヤは考える。ロマヌエツトと三姉妹は実に簡単に言ったが、現実的に考えて二

万ちよつとの軍隊を少しずつでも相手するのは骨が折れるどころか、命の一つや二つは持つて行かれそうなものである。兵たちだって、街に取り残された弱小軍隊であれ、鍛え上げられているのだ。

五対二万と少し。

明らかに、自分たちに敗北の色がこびり付いているのが見て取れた。

これでは勝利の女神も苦笑しか浮かべられないだろう。

「じゃあ突入っ！」

当然のことではあるが、ターニヤが一人悶々としている間にも時間に進む。

ロマヌエツトが最初に、建物へと駆けて行った。

「キヤーっ！」

「閉鎖空間での戦闘っ！」

「ウキウキしちゃっ！」

続くは、何が嬉しいのかむやみに笑い続ける三姉妹。

ターニヤは決断を迫られる。

え、でも、だって、そっちは、逃げる場所が……。

普段は気丈なお姫様だが、この時ばかりはうろたえざるを得なかった。何せ、眼前には死の恐怖がちらついているのだ。復讐を果たすと誓った者にとって、それほど恐ろしいものはない。

「ターニヤさん、早くしないと殺されますよぉ」

ロマヌエツトは笑顔で手招きする。それはまるで、死神が手招きしているようでもある。そう、見えてしまうのだ。

しかしこんなところで止まっていたでは、それこそ死に急ぐこととなってしまう。

前方の鉄の山は越えられない。ここで早くに終わるくらいなら、ほんの少しの可能性にでも賭けてみた方が利口だろう。

ターニヤの中で踏ん切りがついた。

「どうなっても知らないからっ！」

ターニヤの駆け足は、その建物へ向かう。

その手に宝刀を構えながら、戦闘に備えて。

＋＋＋＋＋

なんでこうなるかなあ。

建物に逃げ込んできた五人を眼で追いながら、アルスが溜息をついた。その後ろから迫るオマケとの戦闘は免れないようだ。アルスは背中から黒き剣を抜く。

それは建物の屋上にいた、とあるカップルも察しているようで、厳つい顔厳つい体のカインとか呼ばれていた男は自然体ながらも、構えをとっているようだった。一方、盲目の麦わら帽を被った少女は、背中まで流れる金髪から光の粒子を放っている。

この二人は強敵だな、と素直にアルスは思った。

この『世界』において、本来味方とは進入した際に一緒だった者だけだ。たとえ一時はパーティを組んだとしても、次に出会うときまで仲良し小好しできるわけではない。

それを理解しているアルスだからこそ、今回巻き込まれるであろう戦闘ではこの二人を特に注視することに決める。今後また遭遇した時に対処ができるようにするための処置だ。なぜかついてきた変な男はこの際、無視することにした。

「アルスさん、さっきの軍隊に追いかけていた人たちは大丈夫でしょうか」

アイリは心配そうな声をあげてアルスを見上げた。リフの方も、助けに行こうかどうか迷っているような視線だ。なぜ俺に聞く、と突っぱねたかったが、そもいかない。

「大丈夫だ。何か策があって逃げ込んできたんだろう。それに出来

るだけ巻き込まれる戦闘の回数は少ない方がいいからな」

できるだけ安心させる口調を意識しながら、アイリとリフの両方に話しかける。

それを聞いた二人は、まだ心配そうに眉根を寄せていたが、それでも戦場に突っ込んでいこうという意思は削がれたようだった。特にリフの方はまだ全快ではないので、出て行っただけ足手まといになるだけだというのを自覚しているのだ。勿論、見習い魔法師であるアイリも同じだったが、彼女の場合は戦闘というものをあまり経験したことがないため、どういうものかを知らない。よって、自分がどれだけ非力かを悟っていないのだった。あるいは、草原にて、シャギーテイルをどうにか回避できたという自信がそうさせているのかもしれない。

アルスは落ち込んだように俯くアイリとリフを見ないようにして、再びスーツ姿のごつい男と陽光のような柔らかい粒子を零す少女の方を見やる。

少女の口が開いた。

「アルス？ アルスと言えば、レイグランツ帝国で有名な？」

「そのようだな。噂通り、黒い剣を構えている」

ミルという少女は眼を開けていないのにもかかわらず、しっかりとアルスの姿を捉えていた。盲目であるのだから、嗅覚、聴覚を駆使したり気配だけで悟ったりしているのだろう。大したものである。カインの方は言うまでもなくアルスを見据えていた。サングラスの奥に潜む鋭い眼光に力が籠り、こちらと同様に警戒を露わにしているのが見て取れる。

さらに、今の今まで隅で屋上に生えた草に一人ぶつぶつと何やら呟いていた危ない人がこちらを振り向いた。興味津津といった風である。

どうやらこの三人は俺のことを知っているらしいな。

自分のいた帝国のことを思い出しながら、アルスの眼に鋭さが増した。

「『戦争の帝国』と忌み嫌われるレイグラントの有名人と、こんなところで会えるとはな」

「わお、これはミラクルっ！ 吾輩は材料に恵まれた科学者ですなっ！」

「誰の話が知らんな。俺と同姓同名の有名人がいるのか？ 迷惑なこった」

「カイン勝てますか？」

「どうだか」

ミルはアルスのことなどどうでもいいといったように、カインへ関心を向ける。ミルはカイン一筋、一途にカインのことしか思っていないのだ。他の男のことなど、挟まる余地もない。盲目気味なのは眼だけでなく、心の方もらしい。それでも良いのだが。

「私はカインが傷つくのは嫌なので、戦いは控えてくださいね」

「ああ、お前から離れたりなどしない」

「ええ、私とカインの領域に足を踏み入れる不運な輩は、私の力を以て葬りますわ」

さらりと恐ろしいことを口走りながら、ミルの顔はあくまでも穏やかだった。こういう会話があちらさんでは日常的らしい。

「へえ、アルスさん有名人だったんだ？」

トリフ。もともと好奇心が旺盛なクチらしく、今もアルスに対して深い関心を抱いているようだ。アルスが微妙に表情に歪みを感じながら、苦笑だけ返す。

時に、アイリの方は今もイチヤイチヤと独特の会話を楽しんでいるカップル二人を眺めながら、うつとりとしたような視線だった。アイリの年齢は十六歳だ。こういうことに興味があっても何ら不思議なことではない。

「いいなあ……」

アイリが独り言のように漏らす。

「何がだアホみたいな顔して」

そこにアルスの声が届いた。

「わぁ！　び、びつくりさせないで下さいよっ！」

「一人で勝手にびつくりしといてよく言うな」

アイリが驚きから仰け反ると、それを倒そうとしているかのようにアルスの拳が額を小突いた。

それはちつとも痛くなくて、優しさすら感じ取れる。

今のアイリが少しおかしいのかもしれないが、そう感じた。その時だ。

屋上に駆けあがってくる無数の音が聞こえたのは。

＋　＋　＋　＋　＋　＋

なんでこういうことになるんでしょう。

微笑を湛えたままの奇術師が屋上への扉を開けてみると、そこにはすでに先客が何名かいた。一人、二人……、五人。いや、なんか隅で変なことをしているおかしいのがいるから六人。

とにかく、自分たちを露骨に警戒している六人がいた。

「おやぁ！　先ほど吾輩に話しかけられたあまり、羞恥と緊張で逃げ出してしまったファン一号とその付き物じゃないですかぁ！」

「誰が付き物よっ！」

「では二号ですか？」

「どっちも違うってば！」

さっきからツツコミしかしていないような気がするお姫様と、ベルデロイとかいうフランケンシュタインの中でも特別奇怪な奴がシヨートコントを始めた所為で少し場の空気が和らいだ。とはいっても、ターニヤの隣にいる三人組がケラケラ笑ったり、向こう側にいる水色の美少女と赤色の美女の顔が安心して綻んだくらいだ。残念な

がら、黒い影の様な青年とその向こうにいるスーツ姿のごつい男と車椅子に座る麦わら帽の少女、それからロマヌエットに表情の変化はない。

はて？ あの青年、どこかで見た気が……。

ロマヌエットは多少引つかかるものがあつたが、今はそれどころではない。後ろから軍隊がやってきているのだ。

「私ロマヌエットというものですが、今ちよこつと事情があつて追われておりまして、助けてくださいませんか？」

「軍隊を相手にか？ 御免蒙る、と言いたいが、ここは退路もない。

一時お互いに手を結ぼうじゃないか。そのバカップルもだ」

「バカップルではない。愛という絆で結ばれた永遠の二人だ」

「長いしくだい！」

言っている間に、ロマヌエットが扉から遠ざかる。三姉妹とターニヤもそれに続いた。

そして、今しがた閉じたばかりの扉は開かれる。

戦闘の合図だった。

＋＋＋＋＋

なんでこうなるんですかあ……。

争いを嫌うアイリは落ち込み気味にそう思った。

最前衛にはロマヌエットと名乗った変な格好の奇術師然とした男とアルスが立ち、その後ろには綺麗な金髪をセミロングに纏めた美少女、さっきから何やら騒いでいる三姉妹、対照的にずっと落ちついているカップル。さらにその後ろにはアイリと、それを守るようにリフ、それから頭をブンブンと振り回しだした変な人がいた。

見てみると十一人という数は案外多いもので、間隔を空けているとはいえ屋上の三分の一は占拠していた。

「お前、ライデンワーツの姫様じゃねえのか？ その金髪と碧の瞳は」

アルスが気づいたように金髪の女性を見た。

その女性が少し、俯く。

「ええ、私はターニヤ・チャルネ・ライデンワーツ。あちらの姫です。が、このダンジョンに進入してから反旗を翻されたせいで、私は……」

「ほお！ ファン二号は姫だったのか！ ではこのベルデロイ本人が解体して王族の遺伝子を調べ上げてやる——」

「黙れ奇人。俺はアルスだ」

「よろしくお願いします」

ターニヤが安心したように笑んだ。

その時、アイリがどう思ったか自己紹介を始める。

「私はアイリです！」「なんで俺に言う、知ってるから」

「好かれてますねえアルス君。私はロマヌエツトと言っんですよお、ちなみにこの子は」『パロっ！ パロっ！』『っっていうんですよお」

「お前の名前はさっき聞いたっつの、鸚鵡は主人同様黙れ」

「私たちはねっ！」「三姉妹でっ！」「右から順にっ！」「アカニ

ヤ！」「アオノ！」「ミドリナ！」

「お前らはうるさい！」

「自己紹介した方がいいんでしょうか、カイン」「俺が紹介しておくよ、ミル」

「もうその時点で紹介済んでるじゃねえか」

「アルスさんっ！ アタイはリフト——」

「アイリと同じことすんなっ！」

なんとアイリの自己紹介を機に、全員の名前が明らかになった。どうやらアイリには場を和ませる力でもあるようだ。アルスが密かに評価する。

敵として現れた、大量の兵士たちを前に。

「大体何人くらいだ？」

アルスが隣の奇術師に問いかける。

「分隊として残っていたのは二万ちよいでしたが、おそらくその全部ではないでしょう。もう殆ど用なしとなった姫様を全体で追いかけるのは愚の骨頂ですから」

ロマヌエツトは容赦のない言葉だったが、事実その通りだった。建物に入ってきた兵士の数は確かに多いが、千人いるかどうかくらいのものである。

おそらく、姫一人を殺すのに万もいらなという考えであろう。直に、それが甚だしい勘違いだということを思い知ることになるが。

ぞろぞろと扉が兵士を吐きだす。向こうはどうやら、数がそろって態勢を整えるのを待っているようだ。部隊長と思しき者が先頭に立っている。

先手を打ったのは十一人の即席連合軍（軍と言つのも拙いが）だった。

赤い髪をツインテールに纏めたアカニヤが、赤色に淡く発光するチャクラムを投げつけたのだ。それに追従するようにして、アオノとミドリナのチャクラムも飛んで行った。

密集していたせいでうまく逃げ場の作れない兵士たちが、斬り落とすなどの行動に移れるはずもなく、次々に斬られて血を噴いていた。散々斬りつけてきたチャクラムが、今度は意思でも持っているかのように戻ってくる。

どうやら魔法をそのまま埋め込まれたアイテム、即ち魔法具らしい。三人の武器が淡く発光しているのが、その証明となっていた。向こうは数名が斬られたことで、騒然となっている。

そもそも、魔法が珍しい世界で育ったのだから、魔法具に出会う

ことすら稀だったのだ。

ちなみに、アイリのように魔法を習う者など絶滅危惧種扱いで、向こうの世界にはそういう魔道書などといったものがないため見習いはひどく苦勞することになる。

「キヤハハハハッ!」「よわっちいー!」「ザッコザッコーっ!」「ザコっ!　ザコっ!」

聴覚に働きかける毒を吐きながら、三人姉妹に混ざってパロまでが騒ぎ出した。もちろん周りにいた他の八人（ロマヌエット含む）にとつては迷惑なことこの上ない。

その毒霧を切り裂くようにして、今度はすさまじい音が鳴り響いた。

何事かとアルスが振り返ると、そこには装飾の施された銃を構えたりフがいた。銃口からは煙が立ち、あちらの兵士の一人が地に伏したことから発砲したのだと理解する。

それを機に、部隊長の指示で兵士がこちらになだれ込んできた。どうやら距離をとっていると不利になると悟ったらしい。あちらには弓兵がないのだ。

それを好機と不運な兵士に一瞬で間合いを詰めたのはロマヌエットである。まるで『最初からそこにいたのに誰も気づかないんですからあ』とでも言うように、その姿は一瞬でその場に登場した。

黒いステッキを振り回して、兵士の頭をコツコツと叩いていく。すると叩かれた兵士の頭部から赤い花が咲き誇った。何も比喩表現ではなく、本当に赤い薔薇が咲いたのだ。やがてその花弁が散り、地面に落ちると同時に液状化する。それが血だと気づくのに、兵士たちは近付くまでわからなかった。兜の隙間を縫って咲き誇る邪悪な赤は、見るものに恐怖ばかりを与えた。

その奇怪な奇術に眉をひそめながら、アルスの黒剣が兵士の胸を薙ぐ。紙切れでも裂くようにいとも簡単に分裂し、兵士たちは一瞬で絶命していった。しかもアルスの移動するスピードが速すぎて、誰もその剣を認知できないのだ。

その剣先の行方を眼で追おうとてんやわんやしている内に、一人の兵士がアイリへと近付いていた。

しかし、その兵士も間抜けだった。

アイリの横にはリフが構えているのだが、それ以前に例のカップルがいたのだ。

兵士の足がまた一步近付いた時、兵士の頭上から剣の雨が降り注いだ。

光の剣とも形容できるそれは、幻想的。魔法そのものだった。

悲鳴や怒号が様々に飛び交っていたが、その中に十一人の声はない。

また、別の方で悲鳴が上がった。

そこでは、なにやらしきりに頭を抱えてうずくまる兵士が何人かいた。

「どうですかあ！ 吾輩の開発した薬はあ！」

かわいそうなことに、彼らはどうやら実験体にされたらしい。次々と特大級の注射を振り回すフランケンシュタイン、ベルデロイの狂気の餌食になっている。顔が醜く変形したり、中には眼球の隙間から体液をドロドロ流し続けて悶える者もいた。

アイリとリフ、それからターニヤは後方にいた。

アイリは戦えないため、リフはその防御、ターニヤは狙われていて、戦場に出れば真つ先に集中攻撃される的になるからという配慮だ。

一時戦場と化した屋上では、三原色におぼろげな光を放つチャクラムが飛び交い、赤い薔薇が咲き誇り、黒い剣が薙がれ、光の剣が突き刺さり、おかしな薬でやられた人間の体液やら肉片やらが飛び散り、時々宝刀が振られる音や銃撃が響いていた。

千人程いたであろう兵士たちは、その十一人の圧倒的な力を前になす術もなく死んでいく。

千という数は、あっという間に消化された。

合図

千という数は十一という数に対してはあまりに圧倒的なはずだった。しかし、この『始まりの街』に残っていた兵士たちはライデンワーツの兵隊の中でも底辺であるため、また、十一人があまりに強力でしかも戦場が屋上という数を活かせない不利な状況にあるためか、勝利の天秤は十一人の側に傾いた。

上空から見下ろしても点々と赤が見えそうな程に血はそこらじゅうに飛散し、死体など言うまでもなく山積みだった。死屍累々という表現がこれほど似合う風景もそうないだろう。

「いやあみなさんお強いんですね」

凄惨な屋上を背景に、奇術師が何事もなかったかのように言う。

ターニヤはその淡白さというか、無関心さに少なからず恐怖を覚えた。普通であるならば、死体に対して嫌悪感を覚えたり、追悼を捧げてもいいものであるうが、ロマヌエツトはそうじゃない。

「アイリとかは戦ってないけどな」

「だ、だって、私っ！」

「あーあー、悪いわけじゃないから」

アルスは血が渴いた色なのか剣本来の色なのか見分けがつかないほど黒く染まった剣を背中の中鞘に収めながら、戦闘に参加しなかったことに後ろめたさを感じているアイリを不器用に慰める。

アイリの方は俯いて、悲しそうな表情になってしまった。

「アルスさんの言うとおりだって。アタイだってロクに戦ってないんだから」

アイリの守護にあたり、光の剣をすり抜けてくる兵士たちを蹴りあげたり銃殺していたリフが言うが、全く説得力に欠ける内容だった。ますますアイリの肩が重くなる。

「大体、戦っていないのであればそのお姫様もだしな」とアルス。ギクリと会話を聞いていたその肩がはねる。

「ま、まあそうね」

「それは集中攻撃に遭うとまずいからじゃないんですか？　きちんとした理由がありますし……」

「いいから気にすんなっ！」

「え、あ、はいっ！」

アルスが強引に締めたせいで、アイリは納得がいかなながらも同意してしまった。

端正な顔が上下にブンブンと振られる。

「楽しかったあ！」「もつとやりたい！」「一万くらい！」

投げても装備者の元へ絶対返ってくる『必戻』の印が入った魔法のチャクラムを振り回しながら、三原色の姉妹が物騒なことを言う。どうやら勝利によって一層、気分が高揚しているようだ。

偶々隣にいたターニャは非常に迷惑そうにしているが、三姉妹がそんなことを気にするはずがない。

「今回の実験はなかなか有意義なものでしたっ！」

そのかましい三人組に便乗でもするかのように、額だけフランケンシュタインらしく縫合したベルデロイが絶叫する。その顔は嬉々としており、余程いい成果が挙げられたのだと分かった。ただ、それには兵士の死が土台となっているのだから素直に喜べないところではある。不謹慎と言えば不謹慎な喜び方だ。

「怪我はないか、ミル」

「大丈夫ですよ、カインが守ってくれたから」

絶叫するベルデロイなどまるで眼中にないのは、光の剣を放って自らのテリトリーに何者も近付けなかった最強カップルだ。戦いのさなかでは「愛の力って素敵ね」「ああ、無敵だからな」などと余裕の発言もしていた彼らは、今も今とていちゃいちゃしている。この二人はたとえ極圏だろうと愛の熱エネルギーでほっかほかなのだろつと予測された。

アルスは全員を見渡す。普通であれば、この屋上に転がっているはずなのは自分たち十一人なのだが、それがどうもおかしい。

十一人には怪我人さえ見受けられない。

勿論、それは敵の部隊が弱かったことと、数が揃わないうちに攻撃できたからこそその功績なのだが、それでも彼らが常識外の実力者であるということは明らかだろう。アルスが味方意識を隅へ追いやつて、再び警戒の色を眼に宿した。

そもそも、自分たちは巻き込まただけであつて、今回の戦闘には加わらなくてもよかったのだ。千人の兵士たちが一様にアルスたちをターニヤの味方だと勘違いしたから、黒い牙を？いたに過ぎない。

「アルスさん？」

アイリがアルスの顔を覗きこんだ。おそらく、アルスの急な表情の変化に戸惑ったのだろう。アイリの声には怯懦の色が滲んでいた。その声に反応してか、ロマヌエツトがアルスの視線を真つ向から受け止めた。

互いの間に火花でも散らすかのような、視線のぶつけ合いだ。

「このようなことで、仲間意識は芽生えませんか？」

わざとらしいロマヌエツトのセリフは、ここにいる全員に対して向けられたものだった。まるで、それが当然でしょう、と言っているかのように。

一旦弛緩した屋上の空気が、再び張りつめた。

ピアノ線をピンと張ったような空気のまま、カップルの片割れが口を開く。

「俺とミルは巻き込まれたに過ぎん。今回はお前たちの味方だと勘違いをされたから、仕方なく共闘してやったまでだ。味方意識など元よりない」

飾り気のないさっぱりした言葉。ターニヤの顔が苦しそうに歪む。「そういうことなので、私たちはこの場を早々に去りますわ。こんなところで油を売っている暇はありませんので」

ミルが口に手を当てて淑やかに笑うと、車椅子に力が籠った。カインの歩が進むと同時に、椅子の車輪が回って前進する。

「あ、あの待つてください！」

声を掛けたのはアイリだった。

物静かそうで、何をするにも自信がなさそうなアイリだが時々行動力がある。

「さっきの戦いで使っていたのって、あれは魔法ですよ。あのっ！ 私見習い魔法師なんですっ！ 私に魔法を教えてくださいませんか！」

持てる勇気をすべて振り絞って出した声だというのが、揺れる言葉の端々から伝わった。

カップルの動きが一時停止する。

無論、カインが止まれば必然的にミルの方も停止するのだが、この二人の場合は息をピタリと合わせて同時に止まっているかのようにならだ。もともと一つの生命体であったかのようにその意思は疎通されており、以心伝心を体现しているようでもある。

見えていないはずなのに、ミルの首がゆっくりとアイリの方を向いた。

「先ほどのは確かに魔法です」

悪意を感じさせない微笑みで、唇がうごめく。

「しかし、あなたに教える気はありません。これは、私とカインの愛の力ですから」

さらりと言ってからミルが少し微笑む。アイリがまだ何かを言ううと口元をぴくぴくと動かしたが、言うことが思いつかなかったのか、無言となった。

「ただ、いいことだけ教えて差し上げましょう。何も教えてあげないのではありませんし」

目は閉じたまま、しかし、あくまでも穏やかに少女は語る。

「この『世界』はダンジョンです。塔や洞窟と同じように一階、二階と階層があるんですが、ここではその次の層へ行くために『鍵』

というものが必要になってくるんです。この屋上から見える、あの大きな扉はそれで開くんですよ」

ミルが言い終わってから、アイリは暫し呆然とした。

勿論、それを知らなかったリフやターニヤなどもびっくりしていたが、既知だったアルスとロマヌエツトは別の理由で驚いていた。というよりも、首をかしげていた。

なぜわざわざそれを教える必要があるんだ？ という疑問だ。放っておけば、ここにいる何人かはこの街で脱落させられるかもしれないのに。それなのに、このミルという少女は敢えて情報を嘘に包まずに吐きだした。それが、非常に怪しい。

「私がこの情報を提供したのは、こんなところで終わっていく未来の魔法師の姿に深い悲しみを覚えたからですよ」

二人の疑問を見透かしたように、少女はやりわり言った。

本当のところがどうなのかわからなかったが、あながち嘘というわけでもなさそうだ。

アルスはそう判断し、疑問を払拭する。

「それでは、ごきげんよう」

「二度と会わないことを祈っておけ」

そして、カップルは今度こそ屋上を去って行った。

かましい三人組でさえ大人しくするような空気が少しばかり和らいだ。

続いて出て行ったのは、興奮気味に鼻息を荒くするベルデロイド。彼はどうもこの『世界』のお宝には興味などないようで、先ほどの『鍵』の話にも眼の色ひとつ変えなかった。ベルデロイドにとってダンジョン攻略など関係がないことであり、研究こそがすべてらしい。白衣の姿が一つ、消えた。

取り残されたのは黒い剣士、見習い魔法師、女海賊、奇術師、姫君、うるさい三人組だけとなった。

「私たちっ！」「あの人につ！」「興味あるかもお！」

どこに魅力を感じたのかは永遠の謎だろうが、とにかく三人組が

一気に騒がしくなつて、今しがた去つて行つた白衣の姿を追いかけた。戦闘にてベルデロイが注射器を振り回していた時、三人組の目が煌々と輝いていたからそういう分野に興味があるのかもしれない。十一人が一気に減少し、残る人数が五人。

何も話題がないためか、屋上には沈黙が落ちた。

ミルが言つた通り、この屋上からは巨大な門が見える。錆びた青色をした扉には、金色のぐにゃぐにゃしたよくわからない装飾が施してあり、年季が入っているようにも見えるが、豪華な作りであることに相違なかった。

高いだけ取り柄ですと言わんばかりの壁に埋め込まれるようにして取り付けられており、破壊することなど叶いそうもないような扉だ。正直に『鍵』を使つた方がまだ早いと思わせるだけの威厳に満ち溢れている。

「なあアルスさん」

アルスが扉の方に意識を飛ばしていると、隣の方から声がかかった。リフだ。

「うん？」

「アタイさ、考えたんだけど、この二人と一緒になつて『鍵』とやらを手に入れるつてのはどう？」

「おお、それはいい案ですねえ！」

リフの提案に、ロマヌエツトが白々しく賛同してきた。こいつ、初めからこれを狙つてたなとアルスは心の中で舌打ちしたが、先の戦闘で見る限り、無下に否定できない意見でもある。

「わ、わたしも賛成です。数は多い方が有利でしょうし……」

例のカップルに魔法訓練の拒否をされてから落ち込み気味だったアイリは、今も少ししぼんでいる。語尾がよわわしい調子になっていた。

「姫様は？」

アルスが問う。ターニヤは少し不本意そうな顔になったが、今まで一度も開かなかった口を開いた。

「できれば同行、したいですね」

控えめにターニヤが言った。申し訳なさそうな顔で言うので、何か悪いことでもしたのかと勘ぐってしまう。

「ふむ」

アルスは頷いて、思考にふけた。

今ロマヌエツトとターニヤを迎え入れるということは、確かに心強くもある。しかし同時にライデンワーツから狙われる可能性が飛躍的に高まるのも事実だ。勿論手を出した以上は自分たちもただでは済まないが。

しかし、五人パーティになったとして問題となってくるのは食事だ。

見たところ、十分な食料を持っているのはアルスとロマヌエツトの二名くらい。女性三人はパン一切れですら所持していなさそうだった。これでは食料の尽きが目に見えて早くなる。

戦闘での安全性に票を入れるか、食糧などといった生活面の保険をとるかで天秤は傾くわけであるが、今のところ五人中四人が賛成してしまっている。

多数決ならば、アルスに決定権はない。

「わかったよ、じゃあせめてこの『始まりの街』の中じゃ仲良くやるっ」

アルスが言ったのと同じだった。

それが鳴り響いたのは。

ドドオッ！

すさまじい雷鳴。大地を砕くような轟音が響いて、心臓を強く打つ。

戦争の合図。

争奪戦の、始まりだ。

『鍵』を巡って

ライデンワーツ最後尾の部隊、二万と少しの兵士を率いる分隊には四人ばかり、腕の立つ歩兵隊長がいた。

そのうちの一人、ウィレム・ダーテンバーグは自らの部隊約三千の兵を連れて、草原に現れる。

クルリとところどころ跳ねた金髪の下に、空ですら辟易する青を湛えた瞳。金ぴかの豪華な防具をその身に鎧い、腰には二本の剣を帯びている。男前な顔つきは女性を熱狂させるには十分な程整っており、白馬にまたがって笑顔で街を歩けばスターと見間違えそうな男だった。

戦いの狼煙は上がったというのに、その爽やかな顔には微笑が張り付いている。

「我々の部隊は街に出入りする全ての存在を処理することだ、皆の者っ！ 心してかかれっ！」

およそ、その爽やかな顔には似合わない叱声が飛んで、率いている三千の兵士たちを鼓舞する。ウィレム程凝ったデザインではないものの、黄金色に輝く鎧は同じの兵士たちが咆哮し、草原の地面を揺るがせた。

防衛本能から攻撃という行動に移るシャギーテイルですら、その咆哮には尻尾を巻いて逃げだす。

勝ち誇ったように笑む三千の兵士の後ろには、壮大ともれる巨大な壁が立っている。つまり、ウィレムの部隊は『始まりの街』のすぐそばで待機しているということだ。

この部隊がそこにいる理由は先ほどウィレム本人が述べた通り、街に出入りしようとするあらゆる存在を処理、要は殺すことだ。そうすること、『鍵』を探しに行こうとして街を出る者を排除した

り、新たな敵となる来訪者をその場で始末できる。簡単に言えば、『鍵』を手に入れるために邪魔になるであろう敵を殲滅することが目的なのだ。

現に街を出ようと試みた者は例外なく三千の兵に妨害され、街を出ることが叶わないか、あるいは殺されてしまっている。

ウィレムの部隊は順調に機能していた。

この『世界』において、軍隊という単位で進入したのはライデンワーツだけ。数という点において右に出るものは皆無だ。

たしかに、『世界』に入ってくるのは大抵が結構な実力を兼ね備えた好奇心旺盛な連中だ。しかし、衆寡敵せずという言葉があるように、何者もライデンワーツの軍隊の前には無力だった。なにしろ数が言葉のまま、桁違いなのだ。黄金の兵士たちの海に吞まれて消えるのが関の山であろう。

街の入り口付近には人が溜まり始めていた。皆、『鍵』の存在を知っている連中だ。しかし、彼等が苦しそうな顔のまま為す術もなく止まっているのは、そこにいる誰もがライデンワーツの数の力を理解しているからだ。それほどまでに、数の力は強い。

『無敗』とまで称された伝説の将軍とて、幾万に上る兵士の波には抗えなかった。

金色に神々しく輝く体軀を見せつける彼らは、いまや一つの魔物ともいえる。

ライデンワーツ軍隊の最後尾と言えど、その姿はまさに壮観だった。

「ほう、学習能力の高い奴らだな。もうこちらに突進してくるアホがいなくなったぞ」

自分が一番かっこいいとか思っていそうなウィレムが、檻に入れられた猿を見て嘲笑うような表情になった。せつかくの貴族面が下品に歪む。

ウィレムはすでに、街の出入りを完全に抑え込んだと思っているのだ。それは三千という兵力あってこそその圧力であり、そう思い込

んでもおかしくはないのだが。
しかし。

ウィレムは知らなかった。

今いる大迷宮には、魔物ですら怯える猛者がいることを。

彼等は今、街から進み出し、草原の草を這いつくばらせる。

ウィレムの眉間に疑問という形のしわが寄った。

「さあ、いこうかミル」

「ええ、いきましようカイン」

二人の声が重なったと同時。

地面から槍状の岩が突き出し、黄金の鎧をいくつか貫いた。

＋＋＋＋＋

「ねえ『鍵』手に入れていこうよお！」

ツインテールをぶんぶん振り回して抗議するのはアカニヤだ。甲高い声は耳元でなくとも鼓膜を突き破るというのに、今はいつもにも増して声が大きかった。アオノとミドリナの兩人も同様に叫んで、先ほどから肩を揺らしてケタケタと笑う不気味なフランケンシュタインに抗議している。

街の外れに位置する廃れた施設。元は医療業務などに使われていたかのような、設備の整った施設だった。そこに、ベルデロイと例の三姉妹がいる。

幸いとも言つべきか周辺に人がいないおかげで迷惑をかけることもなかったが、むしろ四人のうち一人はいずれ発狂するんじゃないかというくらいの声量で話している。いや、すでに発狂してはいろのだが、ベルデロイによれば『天才の所業はいつでも凡人に理解

されないものなのだよチミィ』とのことなので、発狂しているという表現は間違っているらしい。どうでもいいことでもある。

ところで今四人はその病院のような施設で何をしているかという
と、三姉妹の方は『鍵』を手に入れるために先ほどからベルデロイ
に抗議しているのだが、肝心の本人はケタケタと不気味に笑いなが
ら試験管やフラスコを器用に持ち、激しく揺さぶっているところだ
った。

お楽しみなのは良いのだが、傍から見れば恐怖すら感じられる。

「ねえねえっ！ 『鍵』欲しいっ！」

「ベルちゃん次のエリア進みたいでしょうっ！」

「ほら早くしないとアタシたち先に行っちゃうぞーっ！」

「ウハハハハやはりこの薬品には神経に効く毒素が含有されていま
すねえ！」

全く話を聞かないベルデロイ。『ベルちゃん』と渾名されている
のにも無視である。

「『鍵』い！」「があっ！」「ほしーーーーーっ！」

「な、なんということだっ！ 吾輩の自作キメラですら三分で葬る
ほどの強力な毒素を含んでいたらしいっ！ 人間など一分持つかど
うか……！」

「人のっ」「話をっ」「聞けえっ！」

本人たちが言えないことではあるが、そう言う気持ちは大いにわ
かるところだ。ベルデロイはただいま新薬に心を奪われてしまっ
ているようで、自分の声以外が届いていないようである。

「あ、じゃあさっ！」

そこでミドリナが何かを思いついた。

わざわざ行儀よく挙手して、発言権を獲得しようとする。

「はいミドリナあ！」「ミドリドリい！」

「その薬品を街の外で暴れてるやつらに試すってのはどっつ！？」

「いいかもあっ！ ついでに新しい研究材料調達っ！」

「新薬投与の実験体確保にもなるよっ！」

「そおれはいい案ですねえ！」

ベルデロイの首は唐突に三姉妹の方を向いた。

まるで人形の様な動きだ。

「では早速行きましようかつ！」

「やったねさすがベルちゃん！」

「さあいざ『鍵』と研究材料の元へ！」

「実験体確保のためえ！」

家屋の一つや二つは音だけで破壊できるんじゃないかというくらい攻撃的な声量で騒ぎ続ける四人は建物から飛び出し、草原へと通じる街の入り口に向かって走り出した。

奇声を上げながら、周りに奇異の目で見られて。

三姉妹はすでに助手のポジションを確保し、ベルデロイは本人のわが道を突き進んでいる。

「ウハハハ「キャハハハ「キャハハハ「キャハハハっ！！」

かましい声は、四つに増えていた。

＋＋＋＋＋

雷鳴が轟いても最初は何かわからなかったが、直に聞こえてきたわあわあいう声のおかげで起こっていることの大体が理解できた。

『鍵』の争奪戦が始まったのだ。

アルスはそう思い至り、足が自然に街の入り口へ向かう。ロマヌエイトもそれに黙って付いてきたあたり、彼の方も今起こっていることの次第が把握できているのだろう。

残念ながら、ターニャ、アイリ、リフの女性三人衆は何が何だかわかっていないらしく、時折質問を挟みながらやや小走りでついて

きた。特にアイリなどは背も低く、大股で歩いてもアルスの普通の歩幅に届くかどうかくらいだったので余計に走らされる羽目になった。

「な、何が起こっているんですか？」

「多分『鍵』の争奪戦だな、今ごちゃごちゃやってるのはライデンワッツの連中だろう」

「ですねえ、私もそう思いますよ」『ヨヨヨっ！　ヨヨヨっ！』

「じゃあアタイらもそれに参加するんですか？」

「馬鹿だな、それじゃあ奴らに後れをとるだけだ」

「アルスさんの言うとおり、今騒々しいこの音は街の入り口の方から聞こえるから、多分分隊を更に小分けにして街の出入り口を抑えているんだと思います」

「じゃ、じゃあ私たちはどうすればいいのでしょうか！」

「街の出入り口は一つしかないのですから、強行突破以外にあるんですかあ？」

「下手に消耗するよりマシな計画を立てろ」

「あ、アタイそういう頭使うこと苦手で……」

「誰かが戦っている間にすり抜けるとかどうでしょうっ！」

「難しいと思うわ。分隊には二万と少しの兵力があつたんだから、その中から数千の兵を割いても影響はないはず。何千という数は鼠が何匹出てこようと、とり囲むのには事欠かない数字よ」

「そうだな、アイリの策は使えそうにない」

「全体に目くらましでも喰らわせてやればどうでしょうっ？」

「どうやって？」

「リフさんを囷に」

「嫌ですよっ！」

「そうですねいですよロマヌエットさんっ！」

「ではターニャさんはどうですか？　お姫様は兵士の目につきますよあ」

「だが危険が伴い過ぎるな。却下」

「最終的に残る手段は一つじゃないですか」

「わぁお姫様強行突破だなんて勇敢ですねえ」『ネエっ！　ネエっ

！』

「仕方ないな、じゃあ部隊の一部を切り崩すだけはやろう」

「わ、わかりますたっ！」

「囓んでる囓んでるアイリさん」

「お前は戦えないんだから下がってろよ」

「は、はいいゝ……」

ということで、五人の案は部隊の一部を切り崩してから草原に逃げるという手段に落ちついた。

原始的でしかも短絡的ではあるが、もしも自分たちが先陣を切れば少数ながらもいるライバルたちがそれに続くだろう。たとえ数千といえど、腕に自信のある冒険家が集うこの『世界』で即席連合軍が結成されればひとたまりもないはずだ。アルスは先ほどの戦いでそれを学んでいる。

しかも、隣を必死に走るアイリは人と人を結ぶ、というか即席で手を結ばせる点においてはいくらかの才能がある。場の空気を和らげられるというのは、貴重な力だ。少しばかりでも警戒心を散らすことができる。

それから自分のすぐ後ろ。おかしな格好の奇術師の実力は侮りがないものがある。敵であれば気を引き締めるところではあるが、味方であれば心強いことこの上ない。赤い薔薇の不思議な力は、人に恐怖を抱かせ、使い方によっては退却させることも不可能ではないだろう。

ターニヤの剣技も並の兵士如きでは話にならない、リフの銃は遠距離攻撃用に使えるし、いざというときは近接戦闘だってできる。アイリの防護を任せられるということだ。

アルスは全員の状態と、先ほどの戦闘のデータを考慮しながら街の入り口へ向かう。

加え、自分たちが先陣を切ればあのフランケンシュタインたちは

ともかくとして、カップルは確実に登場する。もしかするとすでに
もう戦いを開始しているかもしれない。

先ほどのメンバーが半分以上集結すれば、切り崩すくらいのこと
は余裕だろう。

アルスの顔には笑顔が滲んでいた。

激戦地区に足を踏み入れることに些かの躊躇もなく、傍らに余裕
さえ控えさせて。

アルスの手は、背の黒剣にかけられた。

＋＋＋＋＋

なんだあいつらはっ——！

ウィレムの額には、嫌にじつとりとした粘着質な汗が浮かんでい
た。

今、目で見ている光景が信じられないのだ。

「カイン、どうですか？」

「ああ、どんどん道が開いていくよミル」

車椅子に座って、麦わら帽子を被った少女と、執事の様な佇まい
だが厳つい体つきのサングラスをした男。その二人が、三千という
大勢を相手に平然と歩いている。不用意に近付いた兵士は風の刃に
でも切り裂かれたように、鮮血を噴きながらどたと倒れていつ
た。草原の草が血を吸い上げる。

——魔法？ 魔法なのかっ！？

ウィレムは生まれて初めて見る、タネも仕掛けもない術に見入りながら、同時に恐怖すら感じていた。当然、自分が一介の兵士と同じように殺される様を想像したのだ。

あの見えない刃で。

「ふ、不用意に近付くなっ！ 弓兵隊っ！ 撃てええ！」

焦ったウィレムは叫ぶように命令を下した。端正な顔立ちが、今は恐怖一色に塗りたくられている。

弓兵は言われるがままに弓を構え、矢を放った。

弓兵は三千のうち、五百程度の数であったが、降ってくる矢は雨とも形容できるほど多く、普通なら受けきれない量である。

草原を歩いているだけなら仲のいい兄妹がカップルに見える二人だが、残念ながら彼等は『普通』とはかけ離れている。カインのサングラスの奥に潜む双眸が細められ、ミルの微笑が濃く刻まれた。

途端。

屋上でも使用された、かの光の剣が無数に現れた。

「な、なんだ——っ!？」

ウィレムがかすれた声で言ったのも一瞬。光の剣が矢に向かって、正確に突進していった。

ババババババツ!!

矢の雨一つ一つが光の剣に破碎され、形を失っていく。光の剣は矢を破壊してなお、宙に浮いていた。

やがて、放たれた矢全てが処理されたのか、音が止んで光の剣だけが舞台に残っていた。このとき、弓兵隊の幾人かはひたと嫌な予感を覚えたことだろう。

しかし、後悔先に立たず。今更矢を放ったことを悔やんだとしても、遅かった。

光の剣が無情にも、戦意を喪失した弓兵隊へ向かって飛んだのだ。兵隊たちに為す術などあるはずもなく、光の剣に串刺しにされた喉元を貫かれたりなどと、惨状が一瞬にして出来上がってしまった。

しかしカップル二人の表情に変化は見受けられない。少女は目を瞑っているからか、男は少女しか見えていないからか。とにかく、双方とも盲目なのに間違いない。

光の剣が全て兵に突き刺さり終え、しばらく啞然としていたウィレムだが、ここにきてようやく敗北を悟ったらしい。

「うわあああああああつ！　ゆ、許してくれえつ！　い、いいいの、命だけはあ！」

情けない声を必死にあげながら、馬から降り、跪いて両手を地につけた。

部隊長の中でも腕が立つと有名だったウィレムだが、こんな魔法をバンバン使用する人間相手に勝てると思うほど愚ではない。

愚では、なかったのだが。

ザクツ　という、生々しい音がした。

そしてすぐに、草原に一つの首が落ちた。

情けない顔をしたまま息絶えた男の顔がそこにはあり、それを見た部隊の残兵は取り乱す。

統率を失った軍隊ほど脆いものはない。頭がなければ、目も見えないし何も聞こえない、匂いすら感じない。それと同じだ。今はただただ、なだれ込んできた争奪戦参加者の手によって蹴り殺されている。烏合の衆も同然の扱いだった。

＋　＋　＋　＋　＋

アルス、ロマヌエツト、アイリ、ターニヤ、リフの五人が到着したとき、戦場には兵だけでなく、『鍵』を狙う似たり寄ったりの連中の間でも殺し合いが始まっていた。

中には息絶えて地面に転がり、その動かぬ顔面を誰とも知れぬ奴らに踏み台にされるような輩もあり、まさに戦争の生々しさを一部分だけ切り取ったかのようなようだ。

ここにいれば危ない。早々に去ろう。

アルスはこんな状況でも冷静にそう判断し、視線でロマヌエットと確認をとる。

奇術師もそれに賛同したらしく、小さく顎を引いた。笑みは崩れていない。

アイリの方は目の前に広がる惨状を見ようとせず、両手で顔を覆って泣いていた。心やさしい少女にこの光景は、つらすぎたのだろうか。

ターニヤも目には絶望を色濃く湛え、今にも崩れてしまいそうだ。女性陣の中で唯一、不快そうな顔をしつつも平静なリフが横の二人をつついて、正気を取り戻させる。とにかく、この場からはやく離れるのが大事だった。

——この惨状、あのカップルがやったのか？

アルスの中で、それだけが疑問に残った。

最凶カップル

太陽光を黄金に照りかえす一団がある。言うまでもないことではあるが、『世界』において唯一巨大な組織として君臨しているライデンワーツの軍隊だ。

街の出入り口で起こっている惨状も知らずに、彼等は雷が落ちたらしき場所にやってきていた。周りの草が焦げて地に這いつくばり、直撃したと思われる場所に至っては黒く染まった大地の素肌がのぞけていた。今はそこから黒煙が立ち上がっている。

「注意しろ、この辺りにモンスターがいるぞ」

僅かな緊張に体を強張らせながら部下にそう言ったのは、部隊長の中でも剣術に秀でたアレン・コールドウェルだ。両目はライデンワーツ貴族の証である碧色を湛え、格好いいというよりは美しいに分類できる顔立ち。後ろで束ねた金髪は、美女ですら唸らせる程綺麗なものだった。腰に帯びた白銀のレイピアが、彼のさらっとした容姿を更に際立たせている。ウィレムとは別の爽やかを持つ美少年だった。

他のウィレムとの相違点を探すとするのなら、傲慢でないことや少々臆病であること、さらに部下からの信頼の厚さなどであるが、剣術においても申し分ない彼が軍隊の最後尾に残された理由は、その思想にあった。

（ターニヤ姫、無事に逃げきれていればいいが……）

彼は裏切り者ばかりで構成されたライデンワーツ軍の中で唯一、ターニヤの味方だったのだ。実を言うと、王や姫君など王族が急襲されたのにも関わらず、ターニヤが逃げ切れたのにはアレンの活躍が大いに関わっていた。

ターニヤ自身それには気づいていないが、アレンが誰にも気づか

れないように配慮して行ったことなのでそれについての文句はない代わりに、ターニヤが無事に逃げのびれたかどうかだけが、アレンの気がかりだった。元来の臆病な性格の所為で、今回の計画に口を挿むこともできずに王を見殺しにしまったアレンは、ターニヤを逃がす算段をしていたのを誰にも気づかれなかった。しかしそれでも平原エリアに残されたのは、ターニヤの無事を確認するためだ。謀反の中心となった上將軍などから次のエリアへ進む権利を貰ってはいたが、それを丁重に断り、姫君の生死を確認するためだけに彼はここに留まっていた。

ちなみに、ターニヤは例の三姉妹のせいでライデンワーツの兵隊たちに追いかけられているが、アレンがそれを知らないのはターニヤがすでに王族としてではなく、何の変哲もない女として見られているからである。どういうことかと言うと、見かければ殺害するが別に取り立ててどうこう言う必要もない、ということである。

そういうこともあり、アレンは音沙汰ない姫の動向に溜息を隠せなかった。

「たっ、隊長っ！ あちらの方につ！」

大きく息をついたその時だった。

部隊の端から切羽詰まったような兵士の声が全体に響き渡る。

どうやら、お出まらしい。

「態勢を整えろっ！ 所詮モンスターは一体、こちらは五千だっ！
うるたえるんじゃないっ！」

その美しい顔立ちからは予想も出来ないほど大きな叱声が飛んだ。兵は取り乱した心を落ち着かせ、命令通りに態勢を整える。

グオオオオオオ！

現れたのは、棍棒を手に持つ、巨大な豚の戦士だった。

今の状態で草原に出ようとすれば、戦闘に不慣れなアイリや怪我の完治していないリフは無事では済まない、ということでアルス達
は一旦、街に戻っていた。

今は五人が大きな扉の前にいる。

それはロマヌエットの発案であり、扉の前にいれば『鍵』を持つ
た誰かが来るかもしれないから、という理由があった。

先ほどの惨状で取り乱した心情を一時、落ちつかせる目的もごく
わずかに含まれている。

「これで分かったか、この『世界』にやってきているのは例外なく、
ああいう連中だ」

「そのようですねえ、誰とも仲良くやっていけるだなんて考えは捨
てた方がいいですよ」

『ロマヌエット、信頼できる』

「パロはいい子ですねえ」

くぶくぶと不気味な笑い方をしながら、ロマヌエットがパロの顎
を撫ぜる。鸚鵡は満足そうに上を向き、されるがままだ。

「私は、殺し合いなんてしたくないです……」

あの光景を見てから、一向に話すのを拒否していたアイリがよう
やく口を開いた。少しずつでも、落ち着いてきているらしい。その
声は虫の羽音かと思うほどにか細かったが、アルス達の耳にはきち
んと届いた。

「お前とあいつらは違う。全員がその考えだったらそもそも、願
いをかなえる必要すらない世界になっていたさ。平和とか腐るほど手
に入れられそうだしな」

破壊欲も殺人欲も生まれない世界、永遠に平和で退屈しない世界。
世界中の誰もがアイリのような心の持ち主で、容姿で、五体満足で
あれば、そもそも願いを叶える『宝具』が眠るこのダンジョンです

ら存在しなかっただろう。

アルスの言葉にはリフが頷いた。

「アタイもそう思う」

ターニヤも、納得したように首を縦に振っていた。彼女の場合は、シヨックよりも疲弊の方が強いらしい。人が死んでいく様は、想像以上に神経を削られるのだ。彼女自身、屋上での戦いで初めて人を斬っているのだから疲労はピークに達しているだろう。

渴いた血や泥などで汚れた、もともとは高級な深紅のローブはもうボロボロで、ターニヤの疲弊と相俟って憔悴の二文字を体現していた。しかしそれでも、頷く力は弱々しくない。

アイリの口が再び固く結ばれる。

よっぽど人が争うのを嫌うらしい。

「まあアイリさんのような方がいてもいいんですけどねえ」『ネエっ！ ネエっ！』

ロマヌエットの笑い方は言葉の真面目さをことごとく打ち消していた。彼に真摯な態度を望もうとも無駄なようだ。いつだって奇術師は、道化を演じる。

アルスは目を伏せて、できるだけアイリを直視しないようにした。ターニヤは座り込み、宝刀を抱きかかえるようにしてうずくまる。リフは治りきっていない自分の傷を見て、仲間だった連中の顔を思い出している。

ロマヌエットはおどけた態度で張りつめた空気と戦い。

アイリはまた泣きそうになるのを必死に堪えていた。

全員、『世界』に進入して疲れきっているのだ。

初めの平原エリアですらこの状況。アルスは早くもこのダンジョンの攻略の難しさを悟っていた。広大さと深さではどんな大迷宮も及ばないのだから、このエリアは序盤も序盤。言ってしまうと、プローグのようなものだろう。それを考えると、より疲れが重くのしかかってきた。

「アレエ！？ さっきの人たちだあつ！」

「ワオツ！ これって運命っ！？」

「何色の糸で結ばれてんだろねっ！」

「吾輩のファンどもではないかつ！」

加えて、面倒臭い四人組が現れたのだから、アルスの口から溜息が洩れたのも納得がいく。

＋＋＋＋＋

カインとミルの眼の前に現れたのは、巨大な角を生やした牛頭の怪物だった。鋭い牙が覗く口元からは青色の炎がちらつき、二足歩行で立ちあがったその手には巨大なバトルアックスが握られている。絶えず興奮したように鼻を鳴らしており、ギョロつとした目が節操無く彷徨っていた。

「カイン」「わかつてるよミル」

二人の会話が途切れたと同時に、あの黄金の鎧どもを貫いた岩の槍が地面から突き出した。しかし今回はその大きさが違う。兵たちを葬った槍がかわいらしく見えるほど、それは大きかった。

かわりに数は一つだが。

グオオオオオツ

牛頭の怪物、ミノタウロスは一つ咆哮し、それをバトルアックスで打ち砕く。石つぶてが飛散し、危うくカップルに命中するかわれたが、そのときすでに二人の姿はミノタウロスから離れていた。そのミルとカインの周りには、不可侵領域でも創り出しているかのように淡く発光する魔法陣が描かれている。

ミノタウロスはそれにまた興奮し、角を突き出して突進してきた。「カイン詠唱を」」出でよ真鍮の雄牛、断末魔の絶叫をその馥郁たる芳香の煙に乗せて」」

魔法というものは、そのすべてに詠唱するための文句が用意されている。魔法の熟達者になるとそれは省略されることもしばしばあるが、基本的に発動の際は詠まれるものだ。それは単純に威力や効果を高めるためであったり、術者本人の集中力を高めるためであったりと効果は様々だ。

その詠唱が、カインの口によって紡がれた。すると、突進してきたミノタウロスをくすんだ金色のドロドロしたものが取り囲むかのように覆っていった。それはすぐに固化し、どんどん一つの形をとっていく。

雄牛だ。

「あら、趣味がいいですね、『ファラリスの雄牛』なんて「ミルと音楽がききたくなってな」

二人の笑みはあくまでも平常通り。

これから起こることに毛ほどの感慨も抱いていないようだ。

真鍮製の雄牛がやがて、完全なものとなった。

その中には、あのミノタウロスが取り込まれている。

おそらく暴れ回ろうとがむしやりに動き回っているのだらう、雄牛から様々な音が奏でられる。

雄牛はどうやら管楽器の様な作りになっているらしく、猛るミノタウロスが中で咆哮を上げるとすさまじい音が大地を揺るがせた。

どうやら、カインの言うところの『音楽』とはそういうことらしい。

そして、その声はヒートアップする。

カインの右手が持ち上がり、パチンと指が弾いた。

すると、雄牛を象った真鍮の像の真下で灼熱の炎がのたうった。

ちょうど雄牛の腹部に当たるところだ。

ブオオオオオツ!!

真鍮製の管楽器が、今までで最も激しい咆哮を上げた。肌で体感できるほどの音が振動として伝わり、『ファリスの雄牛』の内部で起こっている拷問のような様を訴えてくる。ビリビリする振動が痛いほどだ。

炎が苦しんでいるかのように雄牛の腹を舐めまわし、中のミノタウロスが苦悶の叫び声を上げる。聞いていると頭がおかしくなりそうな大音響だったが、それを『音楽』として楽しんでいるミルとカインにはどうとでもないことのようなのだ。どちらもいつもと同じ表情、特にミルの方は微笑のままだった。

「ヒートアップさせよう」

カインがもう一度、指をパチンと鳴らす。

すると炎の勢いが一段と強くなり、ミノタウロスの叫びが絶叫に変わった。その絶叫は複雑な作りによって、それこそ猛る雄牛のよな音に変調されていく。

雄牛の下で焚かれる猛火が、ミノタウロスの苦しみを表現しているかのようにうねり、熱を真鍮に伝えていく。やがて真鍮はくすんだ金色から黄金へと変わっていき、どれほど熱が伝わったかを全面に出していた。

業火によって、雄牛が金色に仕立て上げられる。

ミノタウロスの断末魔はやがてしぼんでいき、やがて音がしなくなつた。

「これで終わったな」

「みたいです」

事の次第を存分に眺めていた残酷な二名は、やはりいつもと変わ

らぬ調子で立ち去ろうとした。

「あ、『鍵』を忘れていました」

「そうだったな」

途中でミルが思いだし、カインの手によって引き返す。

そしてカインらが近付くと、黄金に輝いた雄牛は頭部からばっくりと中身をさらけ出した。

「なんだか臭いが最悪ですね」

「だが見た目は綺麗だぞ」

肉が焦げたにおいと共に姿を現したのは美しい宝石のように光を反射した、真鍮に焦げ付いたミノタウロスの骨だった。

その焦げの中に一つ、紺碧に輝く物体があった。

カインの手がそれを掴む。

「『鍵』は手に入れたな」

「ええ、帰りましょう」

そうして、二人の姿は再び街に戻っていった。

それぞれの思惑

敵意こそ感じられなかったが、その目に不穏な気配が宿っているのを見逃すアルスではなかった。

爛々と、自らの知識欲だけのために輝いていますとでも言うような目が、アルス達五人を順々にギョロつとした眼鏡の奥に光る双眸で見据える。周りで何やらわいわい叫んでいる三姉妹は相変わらず騒々しかったが、ベルデロイの様子はどこか少し、違和感があった。それもそのはずだ。彼は今、自ら生み出した新薬を誰かに投与したくて仕方がないのだから。

「こんなところで早速実験体と出会えるとはっ！ 吾輩は素材に恵まれた類稀なる偉大な科学者に違いないでしょう！」

偉そうな一人称のくせに、口調はしっかり紳士なベルデロイが空に向けてケタケタ笑った。

その不気味なフランケンシュタインの挙動に、アイリが天敵に睨まれた小動物のように小さくなる。

「『鍵』持ってそんな人たちっ！」「特にあの黒い奴っ！」「特に向こうの変な格好の奴っ！」

「変な格好とは失礼な、これはれっきとした奇術師の正装なのですよ」

キンキン響く声とは対照的に、あくまでも穏やかな口調なロマヌエツト。正直なところ、服装を変だと言われたことよりも四人の様子が明らかに先ほどとは異なることに力を入れているようだ。

今のベルデロイらに、こちらは『味方』として映っていないのだろう。かといって、話しかけてくる以上は雑多に溢れるどうでもいい『他人』でもない。少なくとも、自分たちにとって『敵』と定義するのに十分な雰囲気醸し出しているのには違いない。何しろい

つも以上に危うい眼つきをしている。

「さあ、助手の諸君っ！ 彼らをひっ捕らえてくださいっ！」

「『鍵』ねっ！」「了解っ！」「がってんっ！」

ベルデロイが号令して、いつの間にか助手となっていたらしい三姉妹が突進してくる。手には魔法のチャクラムを持ち、明らかに『捕らえる』という命令以外の行動に踏み切ろうとしている。もたもたとしていたら、捕らえられる前に永遠の停止を強いられるだろう。アルスとロマヌエットの二人は瞬時にそう思ったが、女性三人組はそうでもなかったらしい。

アカニヤの攻撃をアルスが、アオノの攻撃をロマヌエットが抑えたが、残るミドリナの攻撃はターニヤに突進していった。

「動け馬鹿っ！」

叱声を飛ばして襲ってきた敵の手を持ち、ミドリナの方へ投げ飛ばしたのはアルスだ。

アカニヤは見事にぶん投げられ、ミドリナの側面に直撃した。勢いのまま、アカニヤとミドリナが脇へと転がる。

「いったあーいっ！」「何するのよお！」

などと言いつつ、狂ったように笑うのをやめない二人だった。それを無視して、アルスがターニヤの前に立ち塞がる。ひそかにその後ろにアイリとリフが配置されるようにして。

「こいつらは今は敵だっ！ 味方じゃないっ！」

怒鳴られたターニヤは気まずそうな顔になって首を縦に振った。

腰に帯びていた宝刀を抜く。

「リフもぼさつとするなよ！ アイリは戦えないんだからな！」

「勿論さ！」

リフは早くもふつきれたらしく、その声には元気があった。ただ、彼女はまだ怪我が完治していないので敵を出来るだけ回さないように配慮しなければならない。

「助手頑張ってくださいねえ！」

手を振って三姉妹を応援しているのは白衣のフランケンシュタイ

んだ。その手にはなにやら怪しげな注射器が握られており、見る者の警戒心を一層募らせた。もともと胡散臭い男であるのに、そのうえ更におかしな薬品を手を持っているとなるとダウトである。

尻もちをついていたアカニヤとミドリナが地を蹴った。

同時に、ロマヌエツトのステッキと競り合っていたアオノが後方へ飛ぶ。その途中で、例のチャクラムを投げた。

激しい回転をしながら、それはロマヌエツトに突っ込んでいく。当然、無様に斬られてしまう男ではない。

「お花を咲かせてあげましょう」『ショウッ！ ショウッ！』

ギャイン と火花が散ったその瞬間、青に発光していたチャクラムに真つ青な薔薇が咲き誇った。そのまま術者の元へ戻ろうとしていたが、よろよとした軌道は目的地へとたどり着けず、アオノの脇をすり抜けていく。

「あーっ！ アタシのチャクラムがつっ！」

相手の虚につけ込むのが大好きな奇術師が、この隙を見逃すはずがない。

「ガラ空きですねえ」『デッスネエっ！ デッスネエっ！』

ロマヌエツトのステッキがアオノの頭、に触れようとして、アオノが無理に避けたためにその腕に当たってしまった。

「ギッっ！？」

その声を上げたのはアオノ。悲鳴の先には腕に咲いた巨大な薔薇があった。屋上にて、兵を葬っていったあの恐怖の薔薇だ。今はその色が青い。

「助手その2、こちらへ来なさい！」

「はいっ！」

ベルデロイがそれを見てこちらへ駆けだしながら、白衣のポケットからなにやら薬品を取り出した。

ロマヌエツトがそれを食い止めようと、青い背中を追う。

「アオノの仇いっ！」「死ねえっ！」

しかしながら、目的との間に赤と緑が挟まった。ロマヌエツトは

それに足止めを食らう。

「なあにしてるんですかあアルスさん」

「いきなりそちに飛んで行ったんだっつもの！」

言って、アルスはすさまじいスピードでミドリナとの距離を詰めて、その横腹を蹴り飛ばす。小さい体のミドリナがその衝撃に耐えられるはずもなく、アカニヤを巻き込んで再び二人で飛んで行った。しかし今度の二人は無駄口を一切叩かず、機械のように淡々とした動きでもう一度突っ込んできた。

その姿に、先ほどのまでの明るいイメージは見受けられない。

「さあ！ 治りましたね！」

その声とともに、今度はアオノがターニヤ達のほうへ突っ込んでいた。あちらのほうで楽に殺せると思つての行動らしい。その手は驚いたことに、もとからの美しい白い肌を保っていた。

「チツ」

舌打ちして、忙しくもアルスがそこへ走る。傍から見れば、その移動はほんとうに刹那だった。

黒い剣で容赦なく、アオノの体を貫かんと突く。

しかしアオノはそれを最初から予期していたように急停止し、それを寸でのところでかわした。そしてチャクラムを振り、アルスの顔を二分にしようと迫る。

アルスはそれを危機一髪でかわし、もう一度剣を振りかぶることでアオノを後退させた。

「おいおいこいつら完全にガキの動きじゃないぞ！」

「そのようですねえ、あ、また来ましたよ」

さっと隣に現れたロマヌエツトの目が、前の三人組を捉える。

一進一退の攻防は続いていた。

十 十 十 十 十 十

ズズウン、という重々しい音とともに、豚の怪物はその場に倒れ伏した。

五千中、二千という損害を出しながらもアレンの軍隊は見事怪物を打ち倒したのだ。いまだ美しい陣形の崩れていない隊列から、ワアツと声上がる。

「よし、早く『鍵』を回収して他の部隊と合流するぞ！」

怪物の体が、朽ちるように崩れていった。その中から青々とした海の色を湛えた『鍵』が出現する。

兵の一人がそれを手にし、アレンに渡した。

「速やかに移動っ！」

アレンの声が契機となり、部隊が進みだす。

兵たちの足取りは、少しだけ軽いようだった。

近づいてくる、不穏な足音にも気付かずに。

一方、こちらはライデンワーツ最後尾部隊の中ではトップの規模を誇る、一万の軍隊を引き連れた部隊。隊長たるボルックス・フォードは、街の入り口前に広がる惨状に啞然とした。悠々と髭を撫ぜていたその手が止まり、驚愕を表に出す。

「なんだこれは……」

いまだ戦争は続いていたが、その中にライデンワーツの兵隊と思われる者はそのほとんどが地に伏しており、その死屍累々たる様には思わず目を覆いたくなるものがあつた。

まるでゴミのように散在している生々しい死体は、踏みつぶされたものや武器が刺さったままのものも多くあり、本物の戦争がこの場で繰り広げられたのかと錯覚してしまう。

フォードは戦争での実戦経験も持ち合わせている老齢の騎士であるが、こんな惨状を見たのは初めてだった。ライデンワーツの兵を指揮する者が相当な腕だったということもあり、ここまで壊滅状態の自軍を見たことがなかったのだ。

「部隊を二分にして挟撃するっ！ 分かれるおッ！」

フォードの怒声。一万の兵隊はきびきびと動き、その号令に合わせた。

「味方を保護しろっ、いいなっ！ それ囲めえ！」

一万の軍隊は、何百という冒険家たちの殺し合いの中に割って入り、草原の惨劇を終幕させた。

ちなみに言っておくと、フォードは今しがた味方を保護するようにと言ったが、それは『味方ならば助けなければならない』という道徳的な考えではなく、『どうしてこうなったのか』という情報を引き出したいと考えたからだ。裏切り者の団体では味方意識は薄れ、いつか自分も……という不安がぬぐいきれないでいる。

実際、今回の『鍵』争奪戦では軍内部から脱落者が出る予定だ。

（ワシも、殺されてしまうのではないか……？）

そう考えると、それ以上に恐ろしいことがないかのようには思えて仕方がなかった。フォードは欲望に素直な男であるがために、自分の存在が消失する『死』を極端に恐れる傾向にあるのだ。

それはともかくとして、フォードは次の指示を出そうと全軍を見渡した。

そのための号令を掛けようと息を吸い込んだ瞬間、それは急に現れた。

「ギャアッ！」

一人の兵が悲鳴を上げて、死体となった。

「これはこれは、ライデンワーツの軍隊ですか？ カイン」

「面倒な相手にぶつかったものだな、ミル」

わが道に行くカップル登場。

麦わら帽を被った、白銀の長髪をたなびかせる少女の手には、例の『鍵』らしきものが握られていた。

＋＋＋＋＋

「ご苦労だったな、アレン・コールドウェル」

「うん？　どうかされましたか、ロウル・セルヴィンス殿」

丁寧な性格のためか、アレンの言葉は一つ一つが高貴に思えた。まるでそれが癪に障ったかのように、ロウルの醜い顔がさらに歪む。

今回、争奪戦では思想に問題のある者を始末するようという指示があった。

ロウル、フォード、ウィレムの三隊長はそれを受け、対象、即ちアレンを始末する算段をしていたのだ。ウィレムが街の入り口で構えていたのは対冒険家用だけでなく、アレンの部隊に対する策の一つでもあった。味方意識の薄い仲間内で、フォードが軍の壊滅状態を見てうろたえたのはその作戦が失敗したのかもしれないという不安が原因だ。もしくは、失敗するかもしれないという焦燥感なのかもしれないが、それはどうでもいいことだ。

とにかく、今はアレンの命が危険だった。

それは、自身も悟ったことらしい。

（姫を逃がす時の手筈は万全だったはずだが……）

「ゾルディック様が見抜かれた。お前の部隊が姫を逃がし、しかも今回の件においては自らこのエリアに残ることを望んだらしいな。

お前は思想的に問題あり、よってここで土に還ってもらおう」

アレンの心の内を察したように、ロウルが言葉を紡いだ。

話を聞いて、アレンの背筋に冷たいものが走る。

あのゾルディック様が……？

アレンの中でその姿が組み上がる。

戦慄は背中を虫のように這い上がってきた。

すでにばれていた。万全に組んだはずの計画が。

後ろに残った三千の兵は皆、自分の協力者だ。勿論、怪物によってほうむられた二千人も例外ではない。だから後ろを心配する必要はないのだが。

しかし、前方にいるのは残る兵を全て率いたロウルの軍隊だ。どうあっても勝てる数ではない。

逃げるにしても、上手くいくかどうか……。

アレンは考えようとした。

しかし、それはロウルの号令によって妨害される。

「全軍、あちらの軍隊に突撃い！」

＋＋＋＋＋

『鍵』はかのカップルと、アレンの部隊が持っている。

アルスたちは欲望の魔物のようなベルデロイたちと戦い、ライデンワッツの軍隊は裏切り者の候補を始末するために動く。

『世界』でも有数の、大きな戦いが始まった。

『鍵』の行方

絶えず自分の昇格した姿や、傍に美人を侍らせているのを想像している心汚い男がロウル・セルヴィンスという男だ。そのうえ腫れぼったく、ジャガイモをさらにごてごてにいたような脂っこい顔は常に悪臭を放つていそうな程醜悪である。ぶよぶよに肥満した体を金びかの鎧で包み、その瞳には碧色が宿っている。如何にも自分は家柄もよく、平民風情とは違ふのだよというオーラがにじみ出ている。

日が沈みだした頃、彼は逃走を計ったアレンの軍を追っている。残った七千の兵隊を率いて、今逃げている最中のアレンの部隊を全滅させるのが目的だ。

ちなみにこのときのロウルは部隊の最後尾に残り、本来ならばウイレムが防御しているはずの出入り口前まで移動している。もともと周到な準備をしていたため、アレンを街から遠ざけることができたのだ。なにしろこの平原において先回りという手段はあり得ない。アレンの部隊を待ち伏せしていたからこそその結果だった。

ロウルが千の兵を率いて街へ戻ろうとしたのは、六千の兵でも疲弊したアレンの部隊をつぶすのは容易なことだろうと踏んだからだ。概算をして、おおまかな答えを出すのがロウルの性格である。

アレンの逃げる先を予測して兵を二千ばかり伏せてあるのも、その驕った考えを導き出すのに一役買っていた。

ニタアと不快感を与えるような笑みを全面に表し、街の壁が見えてきた。

同時に、変なものも見えてきた。

それは夕日を黄金に照りかえす軍隊。

ロウルの碧眼に飛び込んできたのは、旗印から判断すると同志の

一人であるフォードの一団だ。兵一万を率いる軍隊そのものは不思議ではないのだが、その光景には度肝を抜かれた。

「——なんだあれは」

もくもくと立ち込める黒煙。辺りに散在する死体、死体、死体……。険しい表情で何やら命令を下しているその部隊の隊長たるボルクス・フォード。

怒号は結構な距離があるはずなのに鮮明に聞こえ、「さつさと殺せえ！」だの「挟撃しろお！」といった内容のものがロウルの耳に響いた。それをうけていきり立つフォードの軍隊は一斉に咆哮し、囲っているなにかを懸命に攻撃していた。

そのときだ。ロウルの背筋にひたとうすら寒い気配が通ったのは。

もしかしてフォードの軍隊が今攻撃しているのは、ウィレムの軍隊なのではないか？

そんな疑心が、ロウルの心をかき乱したのだ。

勿論ながらフォードたちが攻撃しているのはあのカップルなのだが、黄金に隠されてしまっているのでは確認のしようがない。ロウルの目には、フォードの軍隊がウィレムの軍隊を呑みこんでいるように見えた。

そんなはずはっ！ と最後の希望に縋るように辺りを見回してみると、転がっていたのは冒険家の他に、ライデンワッツの兵も見られた。その死体に混じって、ウィレムの掲げていた旗が折られたものが散らばっている。

いよいよロウルの背中を走る寒気に冷氣がこもる。

考えれば考えるほどに疑心暗鬼は膨張していき、ロウルの頭の中を寄生虫のようにぐにやぐにやと捻じ曲げていった。

「ぜ、全軍一時退却っ！ フォードの軍隊に感づかれるなっ！」

疑いを最大まで膨らませたロウルは、すでにフォードの部隊を味方として見ていなかった。

今率いている兵の数は千。対してあちらは一万。戦闘によってやや減らされているだろうが、その数を覆すことはできないとロウルは確信し、退却を始める。

自分もそこに転がっている死体と同じにならないようにと。それだけを切望して。

＋＋＋＋＋

黒い剣が薙がれ、空を裂いた。

あと数ミリずれていれば鼻の形に変化を生じていただろうが、上手くかわしたおかげでそれを免れたミドリナは代わりにチャクラムをお見舞いする。

ブオウツ！ 勢いよく振られるが、アルスの姿を捉える事が叶わない。

まるで影と対峙しているかのような、実感の湧かない戦闘だった。戦いには会話する余裕が失われはじめ、次第に全員が疲れを表しだしていた。

ロマヌエツトに近付いたアカニヤに、ステッキが振られる。

その軌道は初期と比べ格段に鈍っており、余裕の表情で三姉妹に挑むロマヌエツトでも疲弊を隠し切れていないのが見て取れた。

しかしだ。

アルスだけはずっと同じペースで延々と三姉妹をあしらい続けている。不気味なほど無尽蔵の体力をベルデロイを含む四人に見せ続けているのにも関わらず、最前線に立つアルスは疲れるという言葉を知らないように一定の呼吸量だった。いや、ハッハッと息を整えてはいるのだが、それがすぐに収まってもとのペースに復帰するのだ。

「おらどうした、勢いがなくなってきたぞ！」

迫るアオノに黒剣を振るいながら叱声を飛ばす。その声にも疲れは含まれておらず、本当に疲れていないのではないかと思われた。挑発的な言動、表情とあいまって、三姉妹のテンションを一気に下げる。変わっていないのは、戦いに殆ど参加していないベルデロイくらいのものだった。

アルス、ロマヌエットに守られるようにして後ろに控えるターニヤ、リフの二人は、アルスの言った通りにアイリを守護していたが、あまり戦闘に参加していないこの二人でさえ息が弾んでいる。だが、最も高速で動き回り、最も剣を振るっているはずのアルスだけはまるでケロっとしていた。

「アルス君は元気ですねえ、何か秘密でもあるんですかあ？」『力アっ！ 力アっ！』

あくまで平常と同じ態度のロマヌエット&パロ。頬に伝う汗だけは隠すことができないようだ。

「ないね」

質問に対して端的に、かつ淡白にアルスが答える。

チャクラムを複雑に振り回してコラボレーションしてくる三姉妹を全て捌いてから、アルスは一段落がついたと言わんばかりに一息つく。実際アルスがそう思ったように、三姉妹の方も肩を上下に揺らしてゼイゼイと息を整えていた。その顔は楽しそうだが、同時にアルスに対する恐怖心もちらつき始めていた。ベルデロイの表情はいつもどおりに楽しそうだったが。

「すごいですアルスさん！ 今までどんな修練を積んできたんですかっ！」

「修練なんてしてない。もともとこういう体質だ」

「冗談でも吐くような口調でアルスがニヤついて言う。その顔は得意げであり、修行を欠かさない努力家の逆鱗に触れるような余裕を控えていた。

「ふむ、さすがレイグラント帝国で名を馳せていただけのことはありますねえ」

すると今まで口端を歪めてアルスを観察していたベルデロイが口を開いた。屋上での件で見た、興味から爛々と輝く両目がぎよるぎよると動く。

「たしか帝国の切り札でしたか？ 漆黒の剣を背負い、最強の名をほしいままにした伝説の男。こんなところで出会えたのは僥倖ですよ。吾輩はあなたを調べたくて仕方がなかったんです」

ベルデロイが一步、アルスに近付く。

対するアルスは不敵に笑うだけだった。

「革命組織『新世界』の双翼、『右舷の天剣』と『左舷の地盾』を一人で葬ったという話はまさに伝説的ですよねえ？ 他にも大国の艦隊を沈めたとか、龍を殺したとか、どこぞの姫君と良い仲だったとか色々噂は絶えないですが、吾輩が主に注視したのはその無尽蔵の体力です。吾輩はあなたの中に何か、とんでもない秘宝が隠されているんじゃないかと思うわけですよ」

ペラペラと語るベルデロイに、アルスは黙って聞いているばかりだ。何も言わず、ただただその一挙手一投足を見逃すまいと目に力が籠っている。今の話にターニャやリフ、アイリなどが驚愕していたがそれは目に入っていないかのようだった。ロマヌエツトや三姉妹は元から知っていたのか、わざとらしく「すごい」みたいなことを言っているだけだ。

「そこです、あなたがたに提案がっ！」

「味方にしてくれ、なら断固拒否」

「じゃあ戦いましょう」

さっきまでの怠惰な態度とは打って変わって、今度はフランケンシュタインが本領発揮してきた。具体的には、地を蹴ってアルスとの距離を詰めたただけなのだが、なにしろその速度が尋常ではない。まず常人には捉えられない動きだった。

こいつ、こんな動きできたのか。と半分感心しながらも、アルスの手が加減することはない。

伸びてくる手を正確にとらえ、その手首を黒い剣が一閃した。

ザシュッ！「イダアアアアッ！」切れた断面からブシュウと血が噴き、「なんちってっ！」

嫌に腹が立つ言い方だった。

「吾輩はフランケンシュタインの怪物なりっ！」

「少しは黙ることを覚えろ」

再び伸ばされたもう片方の手が再度斬り落とされる。

今度はわざとらしい悲鳴を上げることなく、ベルデロイは次に叩きこまれたアルスの蹴りを甘んじて受け入れた。ひよる長い体がボギツと断末魔を上げたが、地面に倒れて再び起き上がる時には何ともないようにピンピンしていた。まさに怪物である。

「お前どうやって死ぬんだ」

「究極至高の研究実験を成し遂げたらですかねえ？」

「それはそんな内容だ？」

「今はあなたを調べることです」

「じゃあ俺はお前を殺せないな残念だ」

というより、誰もベルデロイを殺せそうにはなかった。なぜならその時々で究極至高の研究実験とやらがころころ変わっていきそうだからだ。

そんなことはともかくとして、ベルデロイの攻撃から三姉妹が再び戦闘に復帰した。

今度はフランケンシュタインの戦闘参加もあり、状況は一気に悪化する。

三姉妹をロマヌエツトが一手に受け、不死に近い生命力のベルデロイをアルスが相手する。

「おいターニャ、リフッ！アイリを連れて避難してろっ！」

今の情勢を冷静に判断して、アルスが怒鳴る。

言われた二人は力強く頷き、なぜかアイリも首肯していた。

「アルスさん気をつけてくださいねっ！ロマヌエツトさんもっ！」

最後、場を離れるときにアイリが切実そうな声でそう言った。

アルスが手を上げて、それへの返事とする。

勿論、隙を見逃さなかったベルデロイが即座に攻撃を仕掛けたのだが、それはアルスの蹴りによって封殺された。

＋＋＋＋＋

「やっぱり一万相手はきついんですか？」

「いや、愛の力は無敵のままなんだが、そろそろ同じことの繰り返しで飽きてきた」

「ああよかったです。もしかして怪我をしてしまうのではないかと心配になりました」

「そんなことするわけないな。俺にはミルがついているんだから」

「同じく、私にもカインがついてくれています」

「当たり前だな、俺たちが離れる時なんて一度としてない」

「そうですね、当然のことを聞いてすいません」

「謝らなくてもいい」

「ありがとうございます。愛の道を阻む彼らに天罰のあらんことを」

「その通りだな。全員もつとも苦しい死に方をすればいいんだ」

「素敵ですね、溺死が一番苦しいんですか？」

「聞いたことはあるな。いや、ミルが知っていれば俺が知らないはずはないんだが」

「フフフ、カインと私は一心同体なんですな」

「以心伝心の染色体すら共有している運命共同体だ」

「わあ、美しい響きですね」

「ミルの方が無限に美しいがね」

——という一部の会話を抜き取ったのだが、たった一部の会話でもこれだけ濃厚なミルとカインの仲は相当強靱な絆で結ばれているのだろうと思われた。

囲まれてから一步も動いていないが、発生させている雷の鞭が近

付く兵を皆殺しにしているために悠々と会話を営んでいられるのだ。地面から木の根のように生え出した雷の鞭は全部で六つ。魔法陣を構成する六芒星の頂点のそれぞれから一本ずつが生え出している。ビュンビュンと無軌道に動き回り、カップルに近付くことを至難としていた。

初めのうちに犠牲となったライデンワーツの兵隊は黒焦げで地面に寝転がり、呼吸をしなくなっていた。中には死体から黒煙を発するものもあり、辺りは異様な悪臭に満ちている。言ってしまうと先ほどから街の出入り口は死臭がひどいのだが、生々しい臭いだけでなく焦げ付いた臭いまで嗅覚を刺激するのだが、嗅覚に優れたものなら一発で昏倒するような様だっただろう。

「誰かあの鞭をとめんかつ！」

部隊長を務める老兵士が、部下に向かって怒鳴る。鼓吹も何もあったものではなく、それは最早情けない懇願のようにも聞こえた。

部下の兵に不満の色が宿り始める。

「さつさと二人を始末しろっ！ たった二人だぞっ！」

我を忘れて怒鳴るフォード。次第にイラつきが声にも現れるようになっており、荒々しい声に兵が更に不機嫌面になる。

「ミル、これはチャンスだな」

「ええ、やはり愛の力には天恵が付き物ですね」

この機を逃さなかったのは、このカップルだ。

「錯乱させようか？」

「いいえ、全員『鉄の処女』にかけてしまえばいいのでは？」

「それだと時間がかかってしまう、それに車椅子の車輪が汚れるだろうっ？」

「ああ、言われてみればそうですね。では『リッサの鉄柩』はいかがですか？」

「いや、俺が考えたのは『鋼鉄の乙女』で道を開くという方法だ」

「ああ！ なるほど、カインは頭がいいですねっ！」

様々な拷問器具の名前を上げながら不穏な会話をしていた二人が、

やがて意を決したようにフォードの方を見た。それにフォードの今までの勢いがまるごと削がれる。

「では、詠唱を」

「罪深き子等を鉄の温もりにて永遠の眠りに」

カインの声に終わりが来て、魔法陣が発生した。カップルの東西南北を守るようにして四つ発現し、そこから無表情な乙女を象った結構な大きさを誇る像がそれぞれ現れた。鉄錆びたそれらには腕があり、まるで人を抱擁するかのような姿勢で固まっている。

「まあ、子沢山で嬉しいわ」

「俺も幸せだよ」

言って、二人は街の入り口の方、フォードの逆方向に向かって歩き出した。

この瞬間にフツと雷の鞭が消えていく。

「あ？」

フォードの顔に疑問符が浮かんだ。

が、すぐに振りはらって怒声を上げる。

「今だ殺せっ！」

それを受けて、突如現れた像たちにやや辟易しながらも兵が一気になだれ込んだ。

次の瞬間、カップルが言うところの『鋼鉄の乙女』が独りで動き出し、なだれ込んできた不運な兵の何人かを抱擁した。

「う、うわああっ！」「なんだっ！？」などの声をそれぞれ上げ、

恐怖と疑問に――

ポギユツ！ という甲高い音。骨が折れた音だ。恐怖や疑問に苛まれる前に、激痛に押しつぶされることになった。しかもだ。

「労わるんですよ、わが子たち」

ミルがそう囁いた瞬間、『鋼鉄の乙女』の内部から針が飛び出てきた。当然、抱かれていた兵たちは皆、それに急所を貫かれていく。

この光景を見て初めて、兵の間に冷たい戦慄が走りぬけた。

『鋼鉄の乙女』が抱きしめていた兵を離し、死体に変えて地に落としていく。そしてまた、抱きしめる相手を求めて動き出した。ギゴゴと歪に軋んだ音を立てながら近づいてくる処刑器具は、兵たちにパニックを起こさせるのには十分すぎる効果を発揮した。

誰も、カップルへは近付けなくなったのだ。

「お、おい落ちつけっ！ 全員で特攻すればあんな鉄くず——」
言っている間に、恐れをなした兵はどんどん散っていく。誰も、自ら進んで死に向かおうとしない。そんなことは当たり前のことだった。

『鋼鉄の乙女』に守られてカップルが街に入っていく。

『鍵』の所有者が街に到着。

しかし、未だ門前では戦闘が繰り広げられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8469w/>

世界紀行

2011年10月8日17時23分発行